

平安京右京一条二坊十六町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一九―一

平安京右京一条二坊十六町跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条二坊十六町跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



土坑124出土二彩陶器多口瓶

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、集合住宅の新築工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

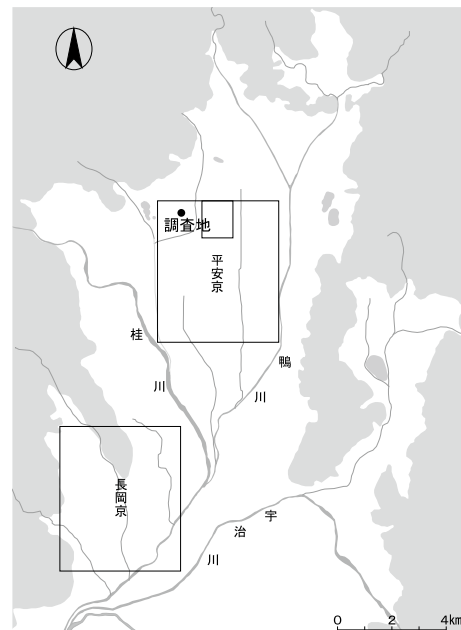
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和元年9月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（京都市番号 18H529）
- 2 調査所在地 京都市北区大將軍東鷹司町109番地1、110番地
- 3 委 託 者 株式会社リンクスコーポレーション 代表取締役 西原 忠
- 4 調査期間 2019年4月1日～2019年4月26日
- 5 調査面積 175㎡
- 6 調査担当者 岡田麻衣子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠」・「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 岡田麻衣子
付章1：降幡順子（京都国立博物館）、付章2：岡田麻衣子
- 14 分 析 火山灰分析は、資料業務職員が行った。
二彩陶器の胎土・釉薬分析は、降幡順子氏に依頼した。
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 16 協 力 者 二彩陶器について、石井清司氏・平尾正幸氏・降幡順子氏に多大なるご支援を賜りました。記して御礼申し上げます。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 調査地の位置と環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 古墳時代の遺構	6
(4) 平安時代前期の遺構	6
(5) 平安時代中期の遺構	6
(6) 中世の遺構	8
4. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 土器類	9
(3) 瓦類	11
5. ま と め	13
付章1 北野廃寺跡出土多口瓶の化学的特徴について	16
付章2 本調査出土の二彩多口瓶について	23

図 版 目 次

巻頭図版1 遺物 土坑124出土二彩陶器多口瓶	
図版1 遺構 調査区実測図 (1:120)	
図版2 遺構 柱列1~3実測図 (1:60)	
図版3 遺構 柵1実測図、溝191・192断面図 (1:60)	
図版4 遺構 柵2・3実測図 (1:60)	
図版5 遺構 1 調査区全景 (西から)	
2 流路50完掘状況 (北から)	
図版6 遺構・遺物 1 土坑124完掘状況 (北から)	
2 出土遺物	

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（北西から）	2
図4	作業状況（南西から）	2
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図6	基本層序柱状図（1：30）	5
図7	柱穴36・42・141・162（1：60）	8
図8	土器実測図1（1：4）	9
図9	土器実測図2（1：4）	10
図10	土器実測図3（1：4）	11
図11	瓦拓影及び実測図（1：4）	11
図12	遺構変遷図（1：250）	14
図13	火山灰顕微鏡写真	15

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	9
表3	掲載土器類一覧表	12
表4	掲載瓦類一覧表	12

平安京右京一条二坊十六町跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市北区大將軍東鷹司町109番地1、110番地で実施した集合住宅の新築工事に伴う発掘調査である。

工事に先立ち、試掘調査が京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）によって実施され、平安時代の遺構・遺物が確認された。この結果を受け、文化財保護課は、原因者に対して発掘調査の指導を行い、委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

調査地は、平安京右京一条二坊十六町の北端及び土御門大路に該当し、これらに関連する遺構の検出が見込まれた（図1）。周辺調査では、弥生時代の溝や室町時代の建物も検出されていることから、今回の調査地においても同様の遺構・遺物の検出が推測された。

調査区は、南北7m、東西25mの175㎡に設定し、調査は2019年4月1日より開始した。（図2）。調査の結果、古墳時代の流路、平安時代の土御門大路の南側溝・柵・柱穴・整地土、中世の耕作溝などを検出した。適宜、図面作成や写真撮影などの記録作業を行い、4月26日に全ての調査を終了した。調査中は、文化財保護課による指導を受けた。



図1 調査位置図（1：2,500）

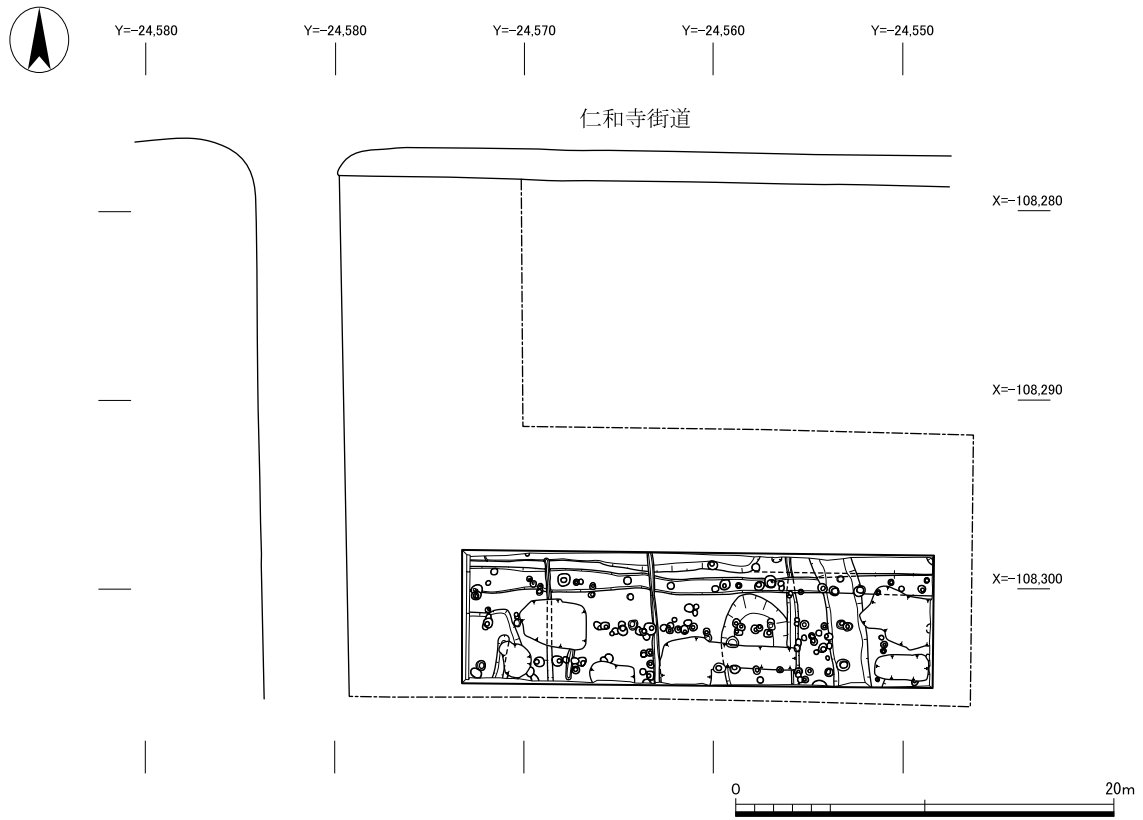


図2 調査区配置図 (1 : 400)



図3 調査前全景 (北西から)



図4 作業状況 (南西から)

2. 位置と環境

(1) 調査地の位置と環境

調査地は、京都盆地の北西部に位置している。旧紙屋川によって形成された扇状地上にあり、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。

調査地の北方には、古墳時代から室町時代の集落遺跡である北野遺跡、飛鳥時代から室町時代の寺院である北野廃寺、西方には、飛鳥時代から奈良時代の集落遺跡である花園遺跡が存在しており、調査地周辺においても飛鳥時代からは人々の生活痕跡が確認出来る。平安京では、調査地は平安京右京一条二坊十六町にあたる。北は土御門大路、東は野寺小路、西は道祖大路、南は鷹司小路に囲まれ、調査地は北端に位置する。居住者に関する史料は確認出来ないが、調査地より北西約300mの平安京右京北辺三坊五町～八町は、宇多法皇の邸宅跡に推定されている¹⁾。周辺の発掘調査では、平安時代中期以降の遺物や遺構の検出が少なく、宅地としての利用は低調であったと考えられる。桃山時代になると、調査地の東側と南側に洛中を囲む御土居が築かれる。調査地の周辺は御土居外側の耕作地で、江戸時代は「大將軍村」として幕府直轄領となる。明治以降は少しずつ市街地化が進み、現在に至る。

(2) 既往の調査 (図5)

調査地近隣の調査例は少ない。以下、主要な調査例を述べる。

調査地西側約300mの花園団地建設での調査(図5-1・2)では、右京北辺三坊七町において、平安時代前期の大型掘立柱建物が多数検出されていることから宇多院との関係性が示唆されている。また、右京一条三坊十六町では、土御門大路北・南側溝や平安時代前期の大型掘立柱建物などが確認されている²⁾。また、1979・1980年の山城高校での調査(図5-3・4)においては、土御門大路南側溝、平安時代前期の大型掘立柱建物などが検出されている³⁾。さらに西側の妙心寺境内にて実施された調査(図5-5)では、土御門大路北側溝が検出されたが、平安時代中期には路面部分の宅地化が開始されていたと推定されている⁴⁾。調査地北西側約300mの大將軍小学校の調査(図5-6)では、弥生時代の溝、平安時代の溝・井戸・湿地・河川、中世の東西柵・東西溝、江戸時代の土坑などが検出された⁵⁾。調査地北側約200mでの調査(図5-7)では、飛鳥時代の南北溝、平安時代の正親町小路南側溝が検出された⁶⁾。調査地北西側約400mでの調査(図5-8)では、奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物、平安時代の掘立柱建物、室町時代の掘立柱建物と石組の井戸が検出された⁷⁾。このように調査地周辺では、平安時代前期の大型建物をもつ大規模な邸宅が多く発見されている。また、奈良時代の集落から室町時代の集落など各時代の遺跡が認められている。

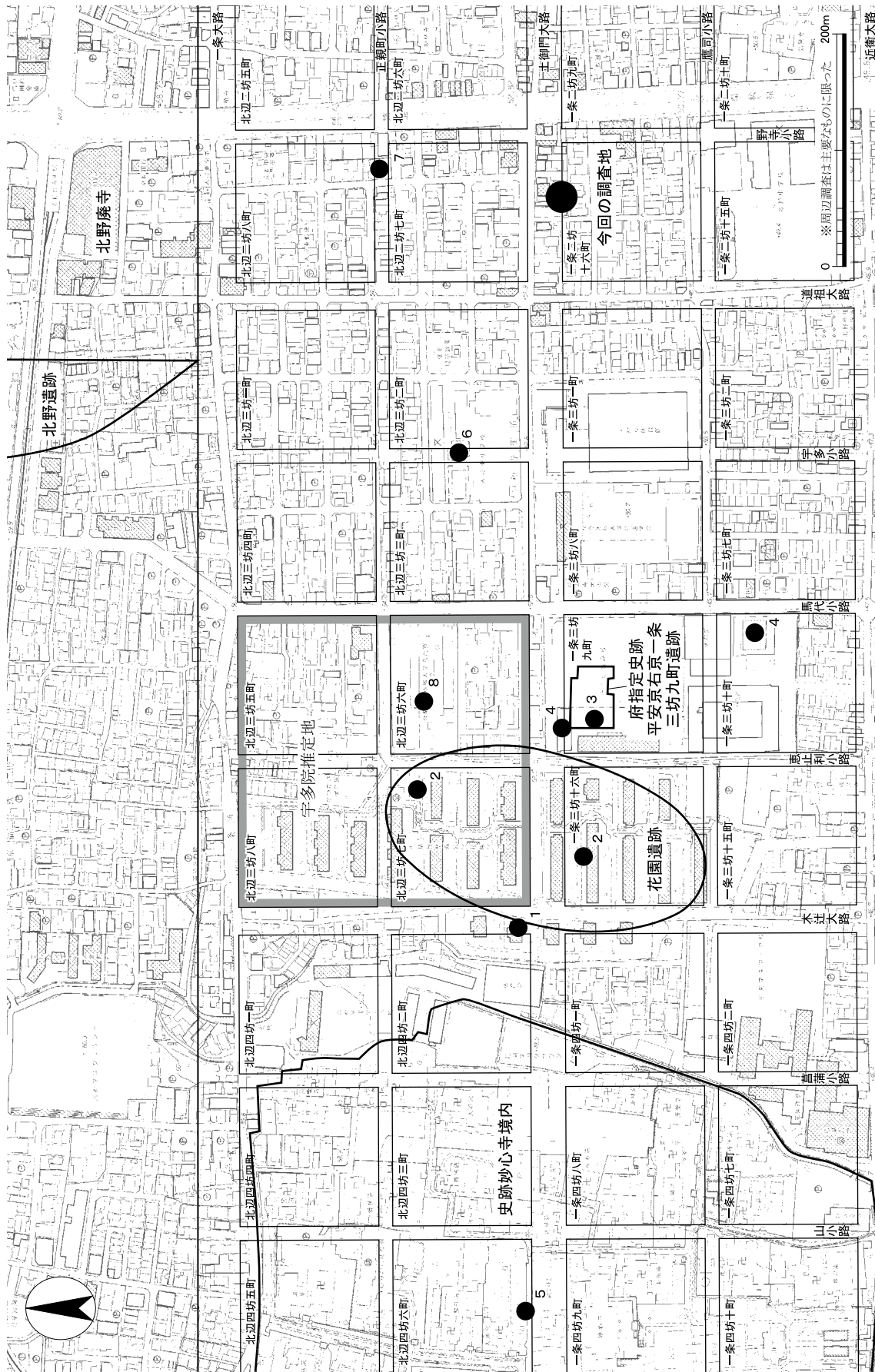


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6・図版1)

調査地周辺の現況地形は、北西部がやや高く、南東部へ向かって緩やかに傾斜している。

調査地の現地表面の標高は52.0～52.2 mである。調査区の基本層序は、現地表面下0.3～1.2mが現代盛土、その下に中世の耕作土が0.18～0.3m堆積する。その下に中世以前の黒褐色微砂の耕作土が0.1～0.25m堆積する。その下には土壌化した黒褐色微砂が0.1～0.4m堆積し、その下はφ3～7cmの礫を多量に含むにぶい黄褐色粗砂の地山である。しかし、

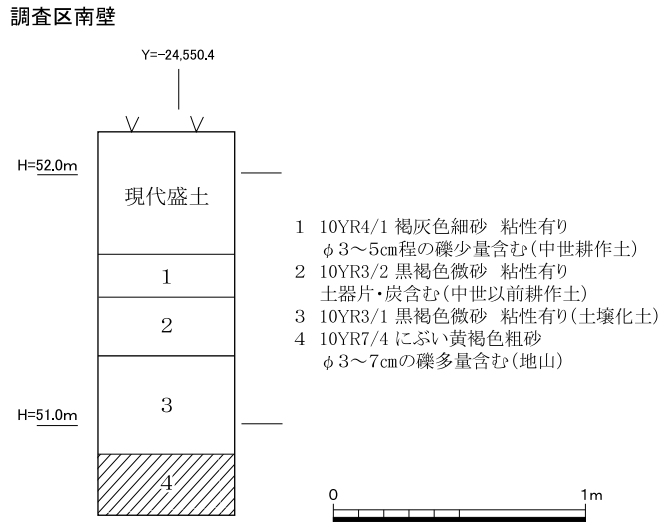


図6 基本層序柱状図 (1:30)

調査区西部では一部黒色土がなく、火山灰⁸⁾を含んだ灰白色粘土層が確認できる地点もあった。

遺構はすべて土壌化土上面で検出し、平安時代中期を中心として古墳時代から中世までの遺構を確認した。

(2) 遺構の概要 (表1)

今回の調査では、古墳時代から中世の遺構を検出した。そのうち9割以上が平安時代中期の遺構である。古墳時代の遺構は自然流路を検出した。平安時代前期の遺構は整地土と考えられる土坑、建物と考えられる柱列を検出した。平安時代中期の遺構は、柵・柱列・溝・土坑・ピットなどがあり、とくに土御門大路の南側溝に関連する遺構を検出した。中世の遺構は、耕作に伴うと思われる素掘り溝を検出した。

以下、検出した各時期の主要な遺構について述べる。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	流路50	
平安時代前期	柱列1、土坑124	
平安時代中期	柵1～3、柱列2・3、溝101・159・191・192、土坑125、柱穴36・42・65・141	溝191・192は土御門大路南側溝
中 世	溝55・119・130	いずれも耕作に伴う溝

(3) 古墳時代の遺構

流路50 調査区東部で検出した南北方向の溝である。検出規模は、幅1.8～2.1m、深さは約0.5mである。調査区北端の溝底の標高は50.90m、南端の標高は50.57mで、溝底面は北から南へ緩やかに傾斜する。溝の南北両端は調査区外へ延長する。溝の埋土から遺物はほとんど確認できず、古墳時代の遺物と考えられる土師器がごく少量出土したのみである。埋土はにぶい黄褐色粗砂に直径3～5cm程の礫を多量に含む。溝の規模や埋土の状態から流路とした。この地を耕作地とする際、埋土が硬く締まっていたために削平できなかつたと推定でき、堆積断面の中央がやや盛り上がっている。

(4) 平安時代前期の遺構

柱列1 (図版2) 調査区南西部で検出した東西方向の柱列である。検出した柱穴は4基である。柱穴は直径0.3～0.5mの円形または楕円形。深さは検出面から0.1～0.5m。検出長は約9m、柱穴の間隔は約3m(10尺)である。主軸方位は東がやや北へふれる。4基いずれも径0.25～0.3mの柱痕跡を確認した。埋土からは土師器と須恵器などが出土した。柱穴の規模や埋土の状況から調査区外の南へ展開する建物の可能性も考えられる。

土坑124 調査区中央南部で検出した平面形が不整形な土坑状遺構である。検出長は南北4.8m、東西3.2m、深さは検出面から0.2mで、調査区外の南側へ延長する。規模や埋土の状況から、地形の凹部を埋めた整地土と考えられる。埋土からは平安時代前期の土師器、須恵器、二彩陶器などが出土した。いずれも掘形などは確認できず、整地を施す過程で廃棄されたものと考えられる。

(5) 平安時代中期の遺構

柵1 (図版3) 調査区北部で検出した東西方向の柵である。検出した柱穴は17基。柱穴は直径0.25～0.6mの円形または楕円形、深さは検出面から約0.2～0.5m。検出長は約20mあり、調査区外へ延長する。柱間は約1.5m(5尺)と推測されるが、建て直しなどにより柱穴が密集しており、判然としない。埋土からは平安時代中期の土師器などが出土している。平安京復元モデルにおける土御門大路の南築地心の推定位置とほぼ一致することから土御門大路の南築地に相当する柵と考えられる。

柵2 (図版4) 調査区北部で検出した東西方向の柵である。検出した柱穴は16基。柱穴は直径0.25～0.6mの円形または楕円形、深さは検出面から約0.4～0.5m。検出長は約23.8mあり、調査区外へ延長する。柱間は約2.4m(8尺)と推測されるが、等間隔には並んでいない。埋土からは平安時代中期の土師器などが出土している。

柵3 (図版4) 調査区北部で検出した東西方向の柵である。検出した柱穴は12基。柱穴は直径0.25～0.6mの円形または楕円形、深さは検出面から約0.3～0.5m。検出長は約23.5mあり、調査区外へ延長する。柱間は約3m(10尺)と推測されるが、等間隔には並んでいない。埋土からは平安

時代中期の土師器などが出土している。

柵2と柵3は近接しており、厳密に分けることができない。また、出土遺物から柵列1・2・3の時期差は、認められない。

柱列2 (図版2) 調査区南西部で検出した東西方向の柱列である。検出した柱穴は3基である。柱穴は直径0.4～0.6mの円形または楕円形。検出長は約3m、柱間は約2.4m(8尺)である。深さは検出面から0.2～0.3m、一部柱穴の底が浅く、柱痕跡を確認できなかったが、おそらく3基すべての柱穴に柱があったと考えられる。埋土からは平安時代中期の土師器などが出土した。柱穴の規模や埋土の状況から調査区外の南へ展開する建物の一部である可能性も考えられる。

柱列3 (図版2) 調査区南部で検出した東西方向の柱列である。検出した柱穴は7基である。柱穴は直径0.4～0.7mの円形または楕円形、検出長は約6.5m、柱間は約1mである。深さは検出面から0.3～0.4m、いずれも柱痕跡を確認できた。埋土からは平安時代中期の土師器皿などが出土した。出土遺物からは時期差は見受けられないが、柱間から柱列3の柱穴群には2時期あり、柱列2と繋がる可能性もある。また、柱穴の規模や埋土の状況から調査区外の南へ展開する建物の可能性も考えられる。

溝101 調査区南西部で検出した南北方向の溝である。検出長は約0.9m、幅は約0.18m、深さは検出面から約0.1mである。溝底部の高低差はほとんど見受けられない。埋土からは土師器や須恵器などが出土した。

溝159 調査区南西隅部で検出した南北方向の溝である。土坑125の下面で検出した。検出長は約2m、幅は約0.5m、深さは検出面から約0.3mである。南端は調査区外へ延長する。溝底部の高低差はほとんど認められない。埋土からは土師器、須恵器などが出土した。

溝191 (図版3) 調査区北部で検出した東西方向の溝である。検出長は約25m、幅は0.8～1.2m、深さは検出面から0.15～0.36mである。東西両端は調査区外へ延長する。溝底部の高低差はほぼ認められない。埋土からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが出土した。

溝192 (図版3) 調査区北部、溝191の北側で検出した東西方向の溝である。検出長は約25m、幅は0.45～0.55m、深さは検出面から約0.5～1.0mである。東西両端は調査区外へ延長する。溝底部の高低差はほぼ認められない。埋土からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが出土した。出土遺物は溝191よりもやや新しい。

土坑125 調査区南西部で検出した平面形がやや不整形な土坑である。検出規模は南北約3.6m、東西約2.8m、深さは検出面から約0.2mで調査区外の南側へ延長する。埋土からは平安時代中期の土師器、須恵器などが出土している。平・断面形から整地土と考えられる。

柱穴36 (図7) 調査区東部で検出した円形の柱穴である。検出規模は直径0.25m、深さは検出面から0.23mである。埋土からは、土師器や須恵器などが出土した。

柱穴42 (図7) 調査区東部で検出した円形の柱穴である。検出規模は直径0.7m、深さは検出面から0.32mである。埋土からは、土師器などが出土した。

柱穴141 (図7) 調査区中央部で検出した円形の柱穴である。検出規模は直径0.45m、深さは

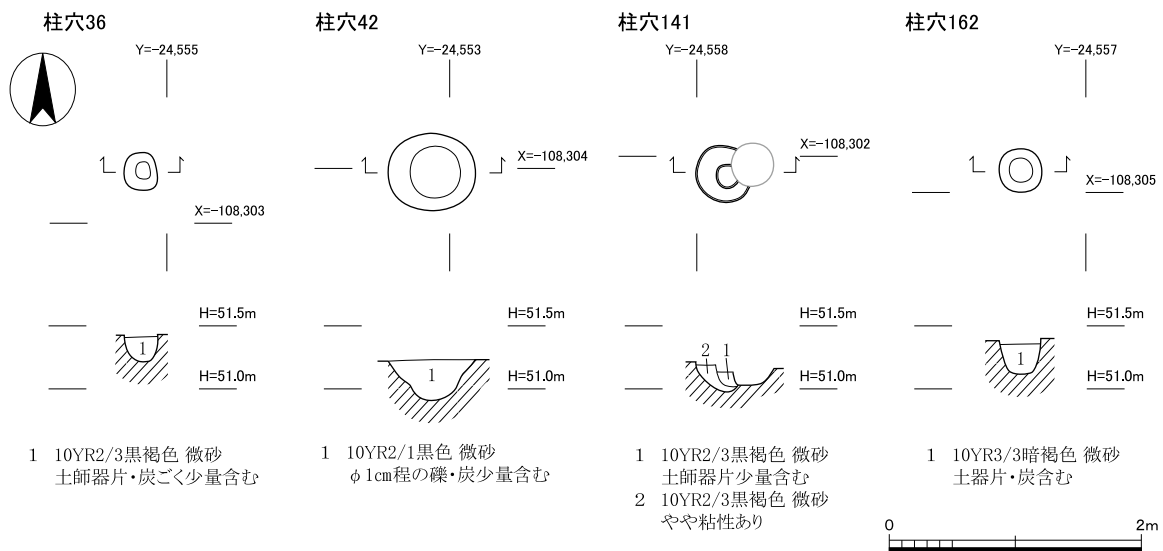


図7 柱穴36・42・141・162実測図（1：60）

検出面から0.25mである。埋土からは、土師器などが出土した。

柱穴162（図7） 調査区南部で検出した円形の柱穴である。検出規模は直径0.35m、深さは検出面から0.3mである。埋土からは、土師器や須恵器などが出土した。

（6）中世の遺構

溝55・119・130 すべて南北方向の溝である。いずれも検出長は約6.5m、幅は約0.3m、深さは約0.15mである。溝底部の高低差はほとんど認められない。溝の規模や埋土の状況から中世耕作溝だと考えられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、整理コンテナにして9箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶器・瓦などがある。そのうち全体の9割以上を土器・陶器が占め、その他は少ない。遺物の帰属時期は、古墳時代から平安時代中期までの各時期のものがあり、平安時代中期が中心である（表2）。

なお、出土遺物の時期は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期の編年案に準ずる⁹⁾。個別詳細については、表3・4にまとめた。

(2) 土器類

出土土器には、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、二彩陶器などがある。土器類の時期は、古墳時代、平安時代前期、平安時代中期に大別することができ、その多くは平安時代中期のものである。

1) 古墳時代中期（図8）

1は、須恵器無蓋高杯である。調査区西部の地山直上の土壌化した面で検出した。口縁部は外湾し、端部は丸く収まる。体部は外側に開きながら立ち上がる。口縁部と体部の境に突帯と凹線が巡る。調整は、内外面ともに回転ナデ。胎土は密で、焼成は良好である。

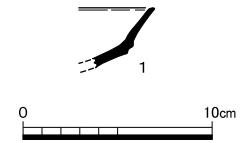


図8 土器実測図1（1：4）

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器		須恵器1点		
奈良時代	瓦		軒丸瓦1点、軒平瓦1点		
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、二彩陶器、瓦		土師器3点、須恵器1点、二彩陶器1点		
平安時代中期	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦		土師器7点、須恵器3点		
合計		10箱	18点（1箱）	0箱	9箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

2) 平安時代前期 (図9)

柱穴136 (柱列1) 出土土器 2は土師器杯である。口縁端部は丸みをおびながらやや内湾する。口縁部と内面をヨコナデ、外面体部をヘラケズリ。胎土は密で、焼成は良好である。京都I期中段階の土器である。3は須恵器杯である。口縁端部は、ややつまみ上がり、底部はやや丸みをおびる。調整は底部を除き内外面ともに回転ナデ。底部はナデ。胎土はやや粗く、白色粒を多く含む。

土坑124出土土器 4・5は土師器皿である。4は口縁端部は内側に肥厚する。調整は内面をナデ、体部をケズリ。外面は底部から口縁部までヘラケズリ。胎土は密で、焼成は良好である。京都I期中段階の土器

である。5は口縁端部は内側に小さく肥厚し、丸みをおびる。調整は内面をナデ、体部をケズリ。外面は底部から口縁部までヘラケズリ。胎土は密で、焼成は良好である。京都I期中段階の土器である。6は二彩釉陶器多口瓶である。中央の口縁部の周囲にやや小形の口・頸部を配する。小形の口・頸部は2個しか残存しないが、本来は4個であったと考えられる。体部は直立気味に立ち上がり、肩部はやや張り気味である。大・小の口頸部はいずれも小さく開きながら立ち上がり、端部は大きく外側に開く。頸部・体部の内面は回転ナデ。施釉された釉薬は、緑釉と白釉(淡黄緑色)で口縁部から斑模様塗り分け、一部は剥落している。胎土は密で橙褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

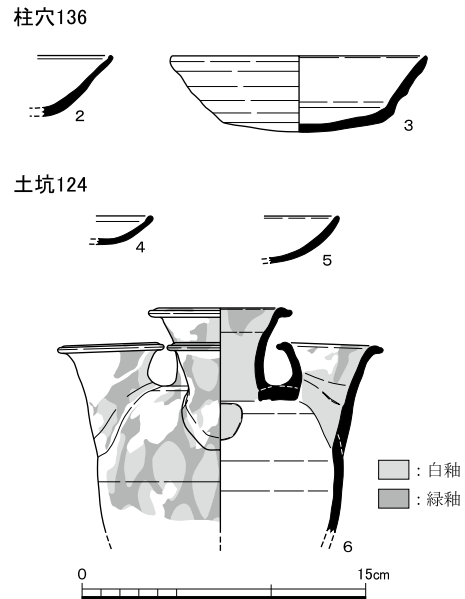


図9 土器実測図2 (1:4)

3) 平安時代中期 (図10)

溝192出土土器 7は土師器皿である。口縁は湾曲し、端部はつまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。京都III期の土器である。

柱穴117 (柵3) 出土土器 8は土師器皿である。口縁端部は湾曲し、つまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。京都III期の土器である。

柱穴65 (柵1) 出土土器 9は土師器皿である。口縁端部は湾曲し、つまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。京都III期の土器である。

柱穴42出土土器 10は土師器皿である。口縁端部は湾曲し、つまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。京都III期の土器である。

柱穴143 (柵1) 出土土器 11は土師器皿である。口縁端部は湾曲し、つまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。京都III期の土器である。

柱穴74 (柵1) 出土土器 12は土師器皿である。口縁端部は屈曲し、つまみ上げる。器壁は薄い。調整は内外面ともにヨコナデ。胎土は密で、焼成は良好である。時期は京都III期古段階である。

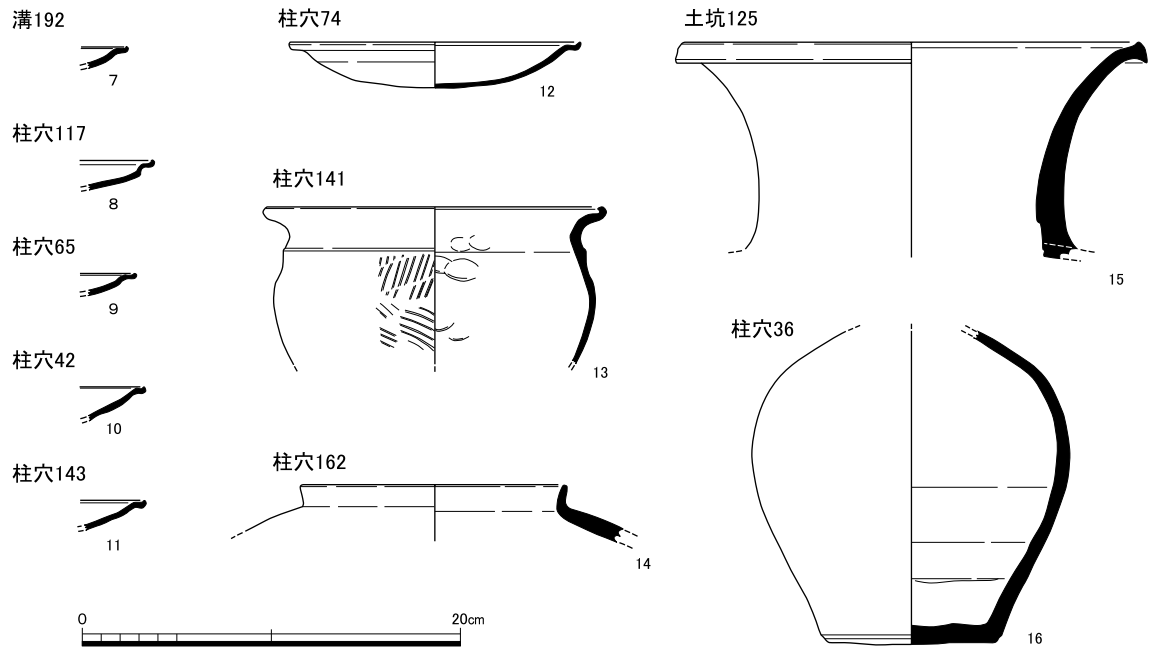


図10 土器実測図3 (1:4)

柱穴141出土土器 13は土師器甕である。口縁部は大きく外側に湾曲し、端部は内側に折り曲げる。調整は口縁部をナデ。体部内面はナデ、一部に当具痕跡が残る。体部外面は平行タタキを施す。胎土は密で、焼成は良好である。口縁部内面には煤が付着する。

柱穴162出土土器 14は須恵器短頸壺である。口縁部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ。胎土は密で、焼成は良好である。

土坑125出土土器 15は須恵器壺の頸部である。頸部は外反しながら立ち上がり、端部は面を成して下垂する。調整は内外面ともに回転ナデ、タテ方向の平行タタキがかすかに残る。頸部下方に粘土ひも接合痕跡が残る。胎土は密で、焼成は良好である。外面の一部と内面全体に自然釉がかかる。

柱穴36出土土器 16は須恵器壺の体部である。底部は平底で体部は倒卵形を呈し、肩部は丸みを帯びる。調整は内外面ともに回転ナデ。底部外面はナデ、中央にロクロ台座の方形がかすかに残る。胎土は密で、焼成は良好である。底部付近に粘土ひも接合痕跡が残る。

(3) 瓦類 (図11)

瓦には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦がある。整理コンテナにして約1箱分出土した。そのうち、溝191と溝192から出土したものが大半である。丸瓦・平瓦は摩滅が著しく、すべて小破片であった。平瓦はすべて凸面は縄目タタキ、凹面は布目のものであった。ここ

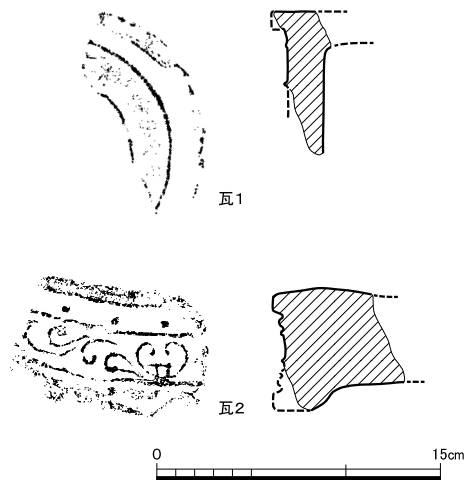


図11 瓦拓影及び実測図 (1:4)

では、軒丸瓦・軒平瓦2点を図示した。

瓦1は重圏文軒丸瓦である。溝192から出土した。瓦当部側面及び上面ヨコナデ、裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、凹面は布目。

瓦2は唐草文軒平瓦である。溝191から出土した。外区には珠文が巡る。瓦当部上面ヨコ方向ヘラケズリ。平瓦部凹面は布目。瓦当部下面及び平瓦部凸面はマメツにより調整不明。7757Ac型式¹⁰⁾。長岡京期の瓦である。

表3 掲載土器類一覧表

番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	色調	備考
1	須恵器	高杯	土壌化層	-	(3.2)	10	2.5Y5/1 黄灰	
2	土師器	皿	柱列1 柱穴136	-	(3.6)	15	5YR6/6 橙	
3	須恵器	杯	柱列1 柱穴136	12.2	4.0	95	10YR7/1 灰白	
4	土師器	皿	土坑124	-	(1.5)	10	7.5YR6/8 橙	
5	土師器	皿	土坑124	-	(2.5)	10	7.5YR8/3 浅黄橙	
6	二彩陶器	多口瓶	土坑124	6.4/ 4.7	(11.9)	40	(胎土)10YR8/3 浅黄橙	
7	土師器	皿	溝192	-	(1.1)	10	10YR7/3 にぶい黄褐	
8	土師器	皿	柵3 柱穴117	-	(1.8)	10	2.5YR8/3 淡黄	
9	土師器	皿	柵1 柱穴65	-	(1.2)	10	10YR6/4 にぶい黄橙	
10	土師器	皿	柱穴42	-	(1.6)	10	10YR7/4 にぶい黄橙	
11	土師器	皿	柵1 柱穴143	-	(1.6)	10	10YR7/6 明黄褐	
12	土師器	皿	柵1 柱穴74	15.2	2.4	50	7.5YR7/6 橙	
13	土師器	甕	柱穴141	17.2	(8.3)	30	7.5YR7/6 橙	
14	須恵器	壺	柱穴162	13.6	(3.0)	10	7.5YR8/1 灰白	
15	須恵器	壺	土坑125	24.0	(11.4)	30	7.5YR7/1 灰白	
16	須恵器	壺	柱穴36	-	(16.5)	60	2.5YR6/1 黄灰	

※()は残存数値

表4 掲載瓦類一覧表

番号	種類	出土遺構	瓦当幅 (cm)	瓦当高さ (cm)	厚さ (cm)	残存率 (%)	色調	焼成	胎土
瓦1	軒丸瓦	溝192	(9.6)	(6.2)	(5.0)	30	7.5YR 6/1 褐灰	良好	密(φ1~4mmの礫を多量含む)
瓦2	軒平瓦	溝191	(3.5)	(9.6)	(2.0)	20	10YR 3/1 黒褐	良好	密(φ1~4mmの礫を含む)

※()は残存数値

5. まとめ

今回の調査では、平安時代中期を中心として古墳時代から中世までの遺構を検出した。以下、調査地における遺構の変遷について、周辺の調査成果も含め、若干の考察を述べる。

古墳時代 古墳時代の遺構は、流路50のみである。周辺の調査で検出されている流路と同様に北から南へ流れている。断面の形状は、逆台形を呈していることから人工的な溝の可能性も考えられる。周辺調査で検出されている自然流路からは、弥生時代から飛鳥時代までの遺物が出土していることや、今回の調査地においても地山直上の土壌化した層より古墳時代中期の須恵器高杯が検出されていることから、北野遺跡が調査地にまで広がる可能性が考えられる。

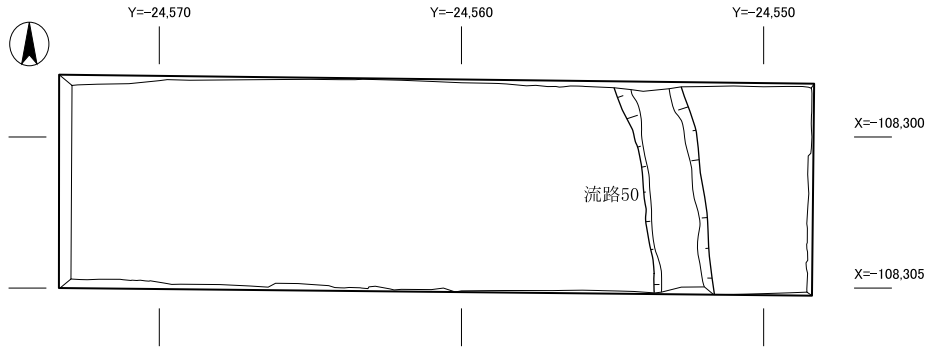
平安時代前期 平安時代前期初頭の遺構は、柱列1と土坑124を検出した。整地や建物と考えられる柱列が存在することから、前期から何らかの土地利用があったことが窺える。また、土坑124からは二彩釉陶器多口瓶が出土している。同様資料の出土例は、全国的に見ても大変まれで、主に寺院や祭祀関係の遺跡からが多い。今回の調査地との関連性については不明であり、今後の課題である。

平安時代中期 平安時代中期の遺構は、土御門大路南端付近で東西方向の3条の柵及び2条の溝を検出している。各遺構からの出土遺物は、時期差が見受けられない。これらの内、柵1及び溝191が土御門大路の南築地芯とそれに伴う南側溝推定位置に最も近い値を示すことから、この2つの遺構が当初の土御門大路に伴うものであると考えられる。その後、柵2・柵3とそれらに伴う溝192が北側に付け替えられたものとみられる。

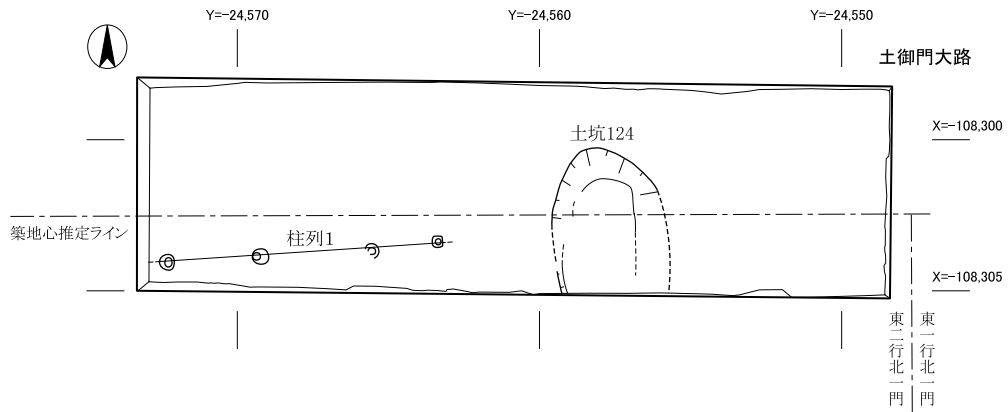
中世以降 中世以降の遺構は、耕作関連の溝を検出したにとどまる。調査地周辺においても中世以降の遺構・遺物の出土は少ない。この地は一般的な右京の様相¹¹⁾と同様に耕作地化されていったことがわかる。

以上、調査地における遺構の変遷について述べた。調査地は、平安時代前期初頭に宅地としての土地利用が始まり、平安時代中期には衰退し、平安時代後期以降には耕作地化していくことがわかった。平安時代前期から中期にかけてどのような人々が利用していたかについてはまだ不明瞭な部分が多いため、今後の調査に期待したい。

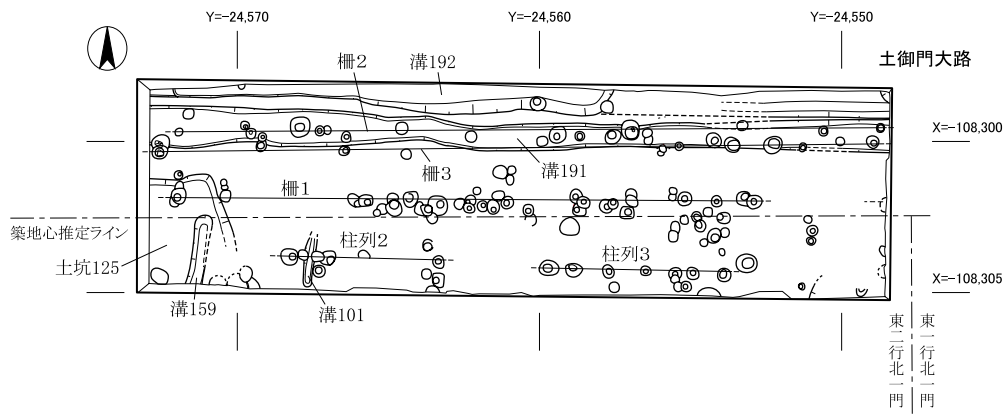
古墳時代



平安時代前期初頭



平安時代中期



中世以降

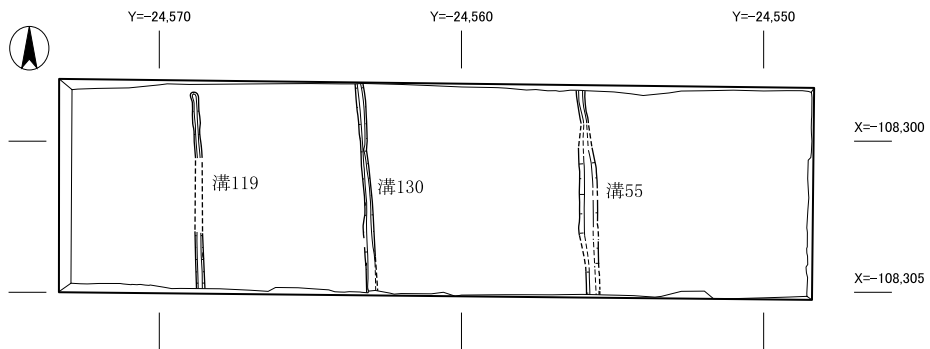


図12 遺構変遷図 (1 : 250)

付章1 北野廃寺跡出土多口瓶の化学的特徴について

京都国立博物館 降幡順子

(1) はじめに

平安京右京一条二坊十六町跡（本報告）の土坑124から出土した二彩多口瓶に用いられる釉薬の特徴について、隣接する北野廃寺から出土している二彩多口瓶および二彩陶器資料との比較を目的とした調査を実施した。さらに栗栖野21号窯出土の多口瓶・短頸壺、幡枝産と推定された冷然院跡出土緑釉陶器の一部の胎土分析も併せて実施し、前述の資料群との比較による生産地の推定を試みたので、その結果について報告する。

(2) 分析資料

今回分析に供した二彩資料は、①本遺跡から出土した二彩多口瓶1点、②北野廃寺から出土した多口瓶および二彩陶器8点、③栗栖野21号窯から出土した多口瓶・短頸壺各1点の計11点である（表1）。①は遺構の年代からその所属時期が平安時代前期、②は平安時代、③は平安時代前期と考えられている。

比較資料として、④冷然院跡出土緑釉陶器のうち、幡枝産と判断された20点の胎土分析結果を併せて報告する。④は遺構の年代から平安時代前期と考えられている。

(3) 測定条件

分析資料①②③④については、表面に付着している土などのクリーニングをおこない、資料採取を実施した。微量ではあるが破壊分析であるため、試料採取は製作技法の観察などに支障をきたさない断面部分でおこなった。本分析は、実験に供する胎土量が微量のため、得られた化学組成は

表1 本調査資料、および北野廃寺・栗栖野21号窯出土資料

No.	器形	器種	遺跡名	備考
1	多口瓶	二彩	平安京右京一条二坊十六町	本調査 土坑124
2	多口瓶	二彩	北野廃寺	12次調査
3	多口瓶	二彩	北野廃寺	1次調査
4	壺	二彩	北野廃寺	13次調査
5	壺底部	二彩	北野廃寺	昭和56年度 広域立会調査
6	盤または皿の高台	二彩	北野廃寺	10次調査
7	破片	二彩	北野廃寺	10次調査
8	瓶	二彩	北野廃寺	10次調査
9	壺	二彩(風化・胎土のみ)	北野廃寺	11次調査
10	多口瓶	二彩	栗栖野21号窯	
11	短頸壺	二彩	栗栖野21号窯	

主にマトリックス部の特徴を示していると考える。

使用した装置は①②③は、蛍光X線分析装置EAGLE III (AMETEK製)、測定条件は管電圧30kV、管電流1000 μ A、X線照射径300 μ m、測定時間300秒、ターゲットRh、真空雰囲気中である。④は、蛍光X線分析装置EAGLE III (EDAX製)、測定条件は管電圧20kV、管電流100 μ A、X線照射径50 μ m、測定時間300秒、ターゲットRh、真空雰囲気中である。

定量分析の標準試料には産業技術総合研究所地質調査総合センター岩石標準試料JB-1a、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-3、JGb-1、JGb-2、JR-1および窯業協会標準試料(R701)を用い、検出元素の各酸化物の合計が100wt%になるよう規格化しFP(ファンダメンタル・パラメーター)法によって定量値を求めた。分析は1資料に対し5回測定し平均値をとっている。

釉薬の分析に際しては、約1mm×2mmの小破片を採取し、付着する胎土等クリーニングしたのちに、白色(透明)釉と緑色釉についてそれぞれ測定を実施した。得られた化学組成は風化の影響を含んでいると考えている。使用した装置は胎土分析と同じであり、測定条件は管電圧20kV、管電流1000 μ A、X線照射径300 μ m、測定時間300秒、ターゲットRh、真空雰囲気中である。定量分析の標準試料には、NIST(National Institute of Standards and Technology)発行の89、620、1412、BAS(Bureau of Analysed Samples Ltd.)発行のSTG-7、8、コーニングガラス博物館標準試料CMG-A、B、C、および産業技術総合研究所地質調査総合センター岩石標準試料JB-1a、JGb-2を用い、検出元素の各酸化物の合計が100wt%になるよう規格化しFP法により定量値を求めた。測定はひとつの資料について3回おこない平均値をとった。

(4) 分析結果

胎土の蛍光X線分析結果を表2に示す。図1に、酸化アルミニウムと酸化鉄($Al_2O_3-Fe_2O_3$)の分布図を作成した。酸化アルミニウムはその含有量にバラつきが大きく、約15～25%範囲に分布する結果となった。奈良時代の鉛釉陶器では、酸化アルミニウム含有量は、奈良時代前半には多い傾向を示し、時代が下るとともに減少する傾向にあるといえるが、およそ20～30%範囲に含まれる資料が多い。奈良時代前半を除くと約20～25%範囲に含まれる資料が最も多いといえる。平安時代の緑釉陶器の場合、時期や生産地による差異もあるが、およそ15～25%範囲に含まれる資料が多い。図2は、幡枝産と推定された資料群および平城宮内出土資料群の測定結果を追加プロットしたものである。栗栖野21号窯跡出土資料は、酸化アルミニウムは15～20%範囲に含まれる。同じく洛北地域の窯として挙げられる幡枝産と推定された緑釉陶器は、酸化アルミニウムは約15～25%範囲に含まれている。

胎土色調は焼成状況と鉄含有量の影響に因るところが大きく、鉄含有量は重要な因子の一つである。今回の資料では、白色を呈する胎土No.6、8の鉄含有量は2.4～2.8%であり、今回の資料群では少ないといえる。他資料は淡赤色を呈しており鉄含有量は2.6～4.0%であった。栗栖野21号窯出土資料No.10、11の胎土色調は灰色から淡赤色を呈しており鉄含有量は2.0～2.2%と少ない結果となった。No.10、11の胎土は、他の資料群と異なり硬質であるが、表面付着物や釉色などから、こ

表2 胎土の蛍光X線分析結果 (wt%)

No.	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃
1	0.25	16.6	74.9	3.0	0.59	1.2	2.6
2	0.43	22.8	68.9	2.6	0.18	1.4	3.3
3	0.67	19.7	72.9	2.0	0.22	1.3	2.9
4	0.42	25.0	65.9	3.0	0.37	1.6	3.7
5	0.35	19.4	72.9	2.8	0.19	1.3	2.9
6	0.34	22.4	71.2	2.1	0.17	1.2	2.4
7	0.46	25.1	66.6	2.4	0.20	1.3	3.6
8	1.0	22.8	69.8	2.3	0.23	0.96	2.8
9	0.50	24.3	66.9	2.6	0.25	1.4	4.0
10	0.99	20.2	72.4	2.7	0.34	0.88	2.2
11	0.84	17.6	75.9	2.4	0.36	0.81	2.0

これらの資料は二次的に被熱を受けた可能性が考えられる。

このように、今回調査した多口瓶を含む二彩資料については、洛北地域を生産地として矛盾のない資料群といえるが、一部資料については、やや検討を要すると考えている。例えば酸化アルミニウムが約20～25%の資料群については、洛北地域の値のバラツキの範囲内と考えられるものの、時代がやや上がる可能性もあるといえる。とくに北野廃寺の創建は飛鳥時代に遡ることから、奈良時代後半から長岡京期に生産された二彩陶器が、搬入されていた可能性も考慮する必要がある。胎土に含まれる含有量の比較的少ない元素である酸化マグネシウムと酸化チタン (MgO-TiO₂) の分布図を作成し (図3) 比較すると、資料を大別できることから、生産地や時期の違いなどによる原料粘土の特徴を示しているといえるのではなかろうか。

釉薬についても測定を実施したが、風化の影響があるため、数値による直接の比較ではなく、グラフ上での分布から、おおよその傾向をみることにした。緑色を呈する釉薬と透明 (白色) を呈する釉薬とに分けて測定を実施した結果を図4に示す。

No.3 緑釉とNo.11を除くと比較的まとまる値を示しているといえる。No.11は製品を二次的に被熱を受けていると考えられることから、釉薬の化学組成が変化している可能性も考えられる。No.3は、緑釉部にマグネシウムが顕著に検出された。また、緑釉では銅の不純物と考えられる亜鉛を検出する資料がこれまでも確認されている。今回分析した資料では、約半数の資料から亜鉛が検出されたため (図5)、緑色の着色に使用された銅原料は、少なくとも二種類あることが考えられる。またNo.3では、白色 (透明) 釉と緑色釉のどちらからもヒ素が検出されている。これは着色料ではなく、鉛釉の原材料である鉛原料にヒ素が含まれていたと考えられる。

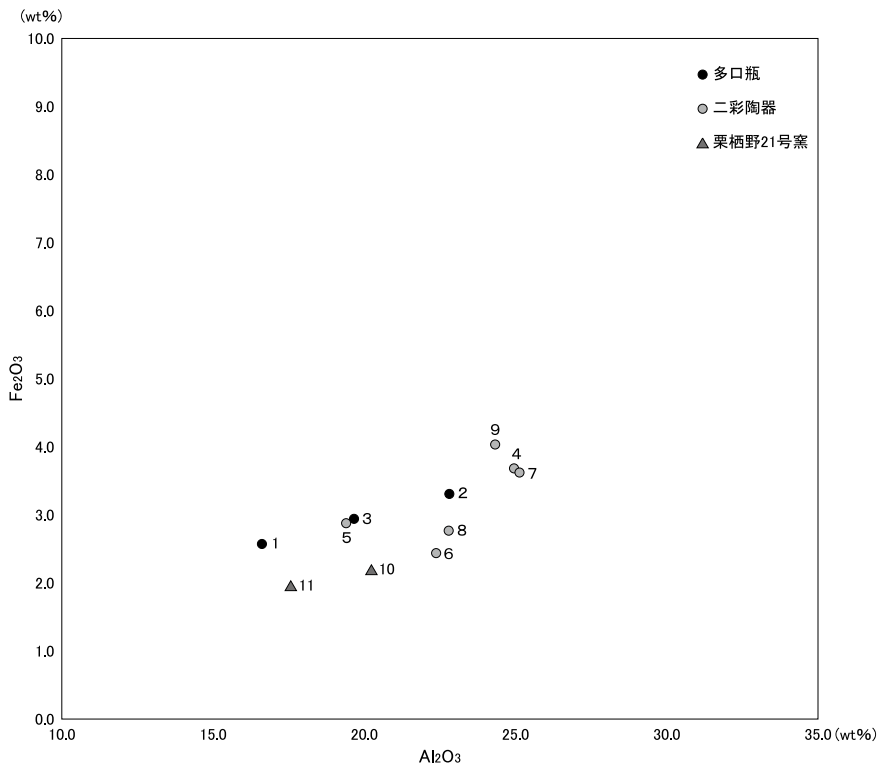


図1 蛍光X線分析結果 (胎土)

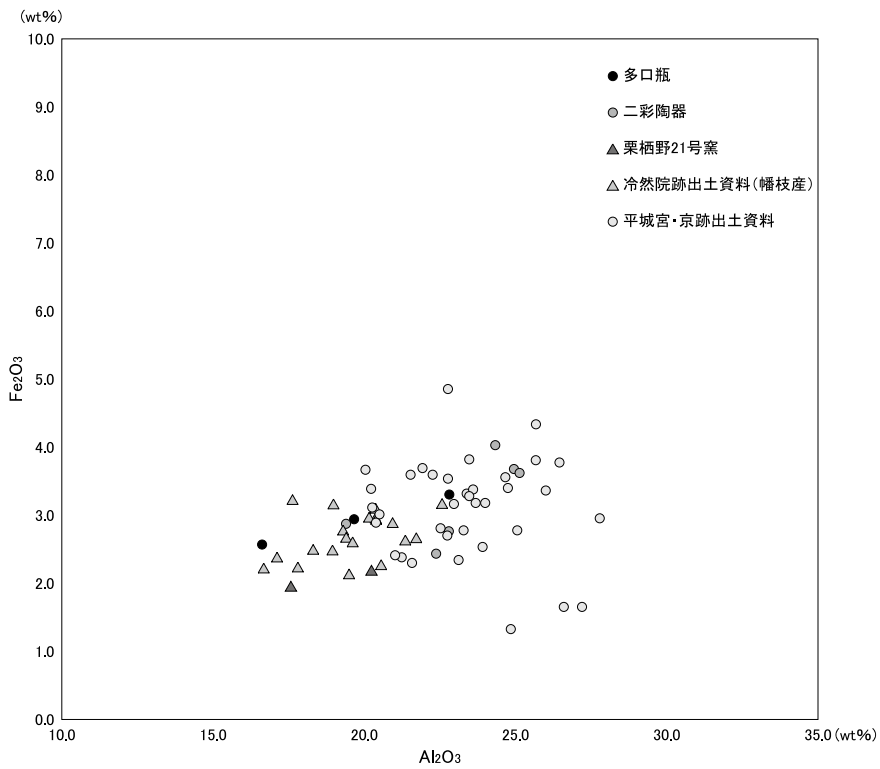


図2 蛍光X線分析結果 (胎土、図1に冷然院跡資料・平城宮内出土資料を追加)

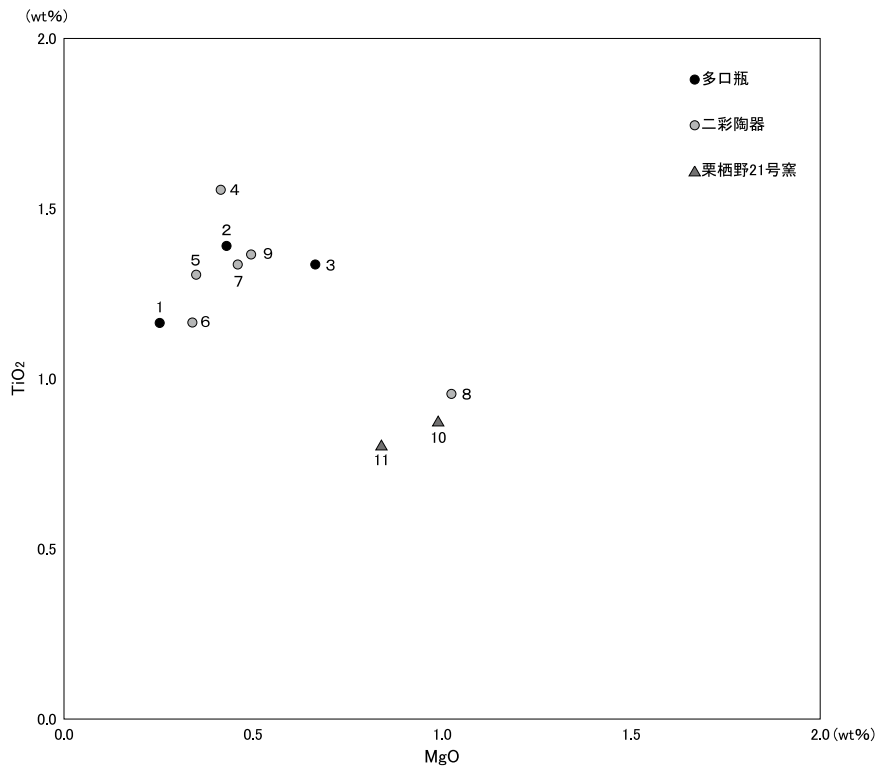


図3 蛍光X線分析結果（酸化マグネシウムと酸化チタンによる比較）

表3 蛍光X線分析結果（釉薬）

No.	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	PbO	As
1-G	0.34	0.61	5.6	52.9	0.61	1.2	0.14	0.72	2.5	tr	35.4	tr
1-W	0.10	0.73	7.8	65.1	0.73	1.6	0.19	0.57	0.31	tr	22.9	tr
2-G	0.57	0.27	3.6	33.9	0.39	0.61	0.34	1.1	5.4	tr	53.7	nd
2-W	0.12	0.30	5.3	55.3	0.37	0.36	0.30	0.90	0.81	tr	36.2	nd
3-G	0.43	1.5	5.6	45.3	0.51	0.68	0.19	0.72	2.5	0.12	42.4	○
3-W	0.59	0.54	5.4	37.5	0.55	0.64	0.20	0.68	0.39	tr	53.5	○
4-G	0.06	0.38	6.0	69.0	0.16	0.62	0.19	1.0	1.83	tr	20.7	nd
4-W	0.20	0.32	2.8	62.9	0.22	0.42	0.20	0.79	0.64	tr	31.5	nd
5-G	0.15	0.51	7.6	44.3	0.88	0.36	0.21	1.03	1.9	0.29	43.1	tr
5-W	0.54	0.32	4.3	52.0	0.35	0.24	0.22	0.81	0.60	tr	40.5	nd
6-G	tr	0.67	5.6	66.0	0.08	1.1	0.21	0.70	2.2	tr	23.4	tr
6-W	0.15	0.18	5.2	34.9	0.37	0.24	0.23	0.78	0.19	tr	57.6	nd
7-G	tr	0.69	6.2	55.8	0.24	1.5	0.24	0.95	3.7	tr	30.6	tr
7-W	0.31	0.20	5.0	36.1	0.39	0.25	0.20	0.90	1.2	tr	55.3	nd
8-G	0.41	0.48	5.3	40.7	0.43	0.47	0.12	0.85	3.8	0.29	47.1	nd
8-W	0.10	0.65	5.6	35.6	0.48	0.25	0.35	0.82	2.6	tr	53.5	nd
10-G	0.27	0.45	3.2	35.8	0.54	0.41	0.15	0.98	4.8	0.32	53.0	nd
10-W	0.46	0.40	4.6	37.6	0.98	0.74	0.25	0.94	0.66	tr	53.3	nd
11-G	0.17	0.38	6.0	48.3	1.6	0.38	0.24	1.0	2.1	0.19	39.5	nd
11-W	0.15	0.52	7.3	61.3	1.4	0.23	0.31	0.94	0.06	tr	27.7	nd

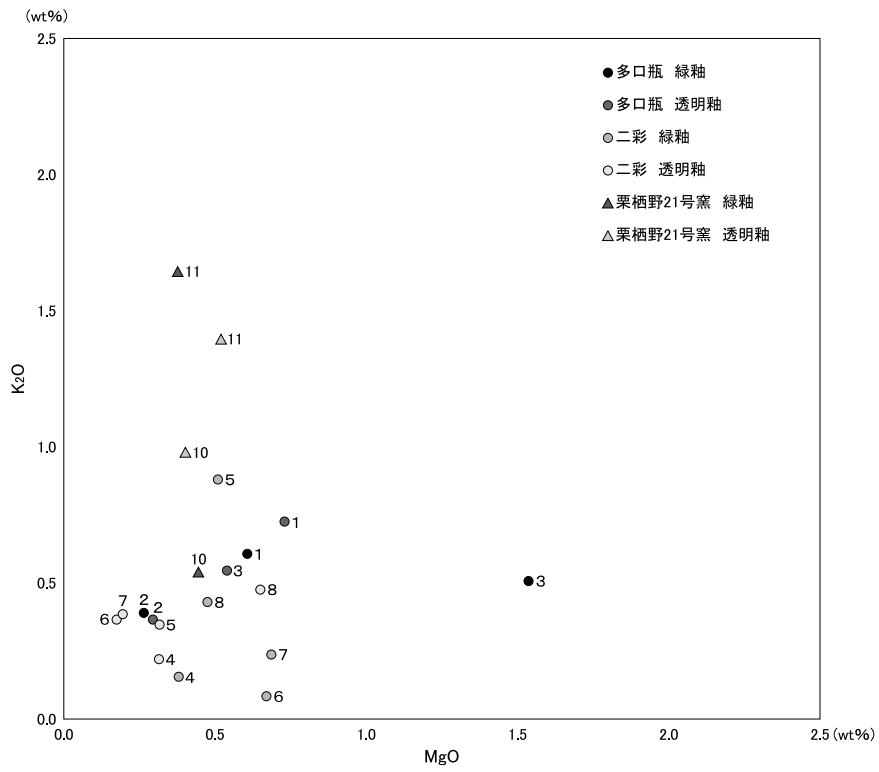


図4 蛍光X線分析結果（釉薬）

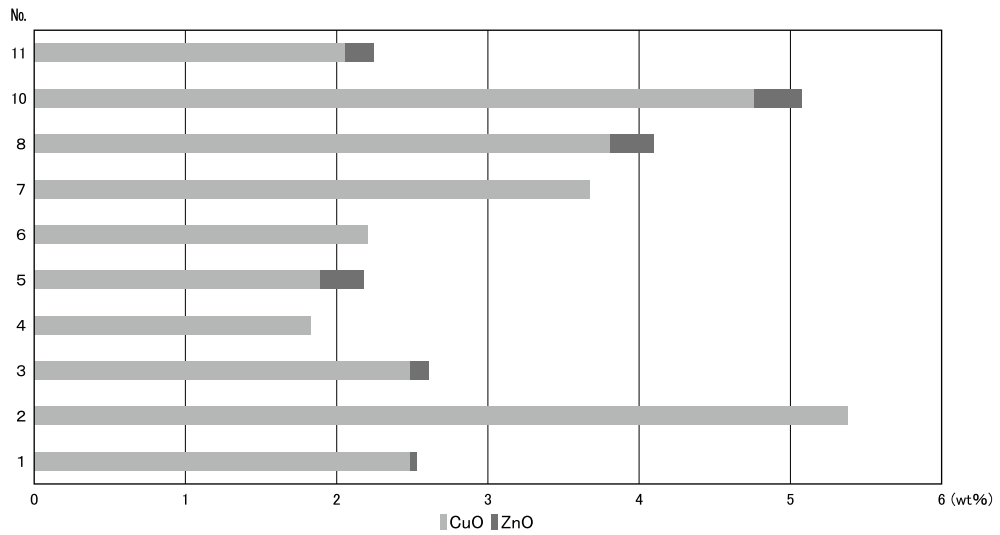


図5 緑釉で検出される亜鉛

(5) まとめ

本調査地から出土した多口瓶、および北野廃寺出土多口瓶、栗栖野21号窯出土多口瓶等の調査を実施した。胎土マトリックス部分の測定から、今回調査した多口瓶は、洛北地域を生産地とする資料群と分布範囲を同じくする結果となったが、奈良時代後半から長岡京期に生産された二彩陶器が搬入された可能性も考慮する必要があると考える。

本報告の分析手法により生産地研究を検証できる見通しが立てられたが、今後さらにデータを蓄積することで産地推定の信頼性を高めていく必要がある。今後も分析事例を増やし検証をしていきたいと考えている。

参考文献

- ・「冷然院跡出土緑釉陶器釉薬の分析」降幡順子・尾野善裕、『平成27年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品』京都市文化市民局、pp.72-74、2016
- ・「東アジアの中での日本の古代鉛釉陶器の化学的特徴」降幡順子・齋藤努・玉田芳英、『2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム発表要旨集』、pp.122-123、2015
- ・「古代鉛釉陶器・施釉瓦の化学分析からみた特徴」降幡順子・石橋茂登・玉田芳英・西光慎治・齋藤努、『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』、pp.84-85、2015
- ・「奈良三彩技術と化学的特徴研究-平城宮陶器Ⅱ之奈良」降幡順子・神野恵・除楓訳、『華夏考古』2015-4、pp.135-140、2015

付章2 本調査出土の二彩多口瓶について

岡田麻衣子

(1) はじめに

二彩陶器とは、鉛を主体媒熔剤とした緑色と白色¹⁾ 2色の釉薬が施され、800～850℃程の低火度焼成による施釉陶器のことである。二彩陶器を含めた多彩釉陶器²⁾は奈良時代に中国の唐三彩の影響を受けて始まったもので、平安時代初期まで製作された³⁾。その中でも二彩陶器の出土例は全国的にみてもかなり少ない。比較的出土例が多い京都市内においても小片含めて約65点程であり(表1)、量も遺物コンテナ2個分にも満たない。また、生産地についても不明な点が多く、現在生産窯として確認されているのは平安時代初期の京都府京都市栗栖野21号窯のみであり、他に可能性が考えられるものは奈良時代の奈良県奈良市佐保山遺跡がある⁴⁾。

また、今回の調査で出土した多口瓶は、「五口壺(瓶)」「多口壺」「多嘴壺(瓶)」などとも呼ばれ、中心に1つの大きな口(以下、「大口」とする)があり、その周りに肩部から立ち上がるようにして4つの小さい口(以下、「子口」とする)が付いた瓶(壺)である。多口瓶の出土が確認されている遺跡を全国的にみると、寺院跡を主として、都城や官衙など限定されている。現在20点(内訳:緑釉2点、二彩13点、三彩5点)しか確認されていない⁵⁾(図1、表2)。特殊な形に加えて出土する遺跡に寺院が多いことから仏具と考えられている⁶⁾。しかしながら多彩釉多口瓶は、時期や

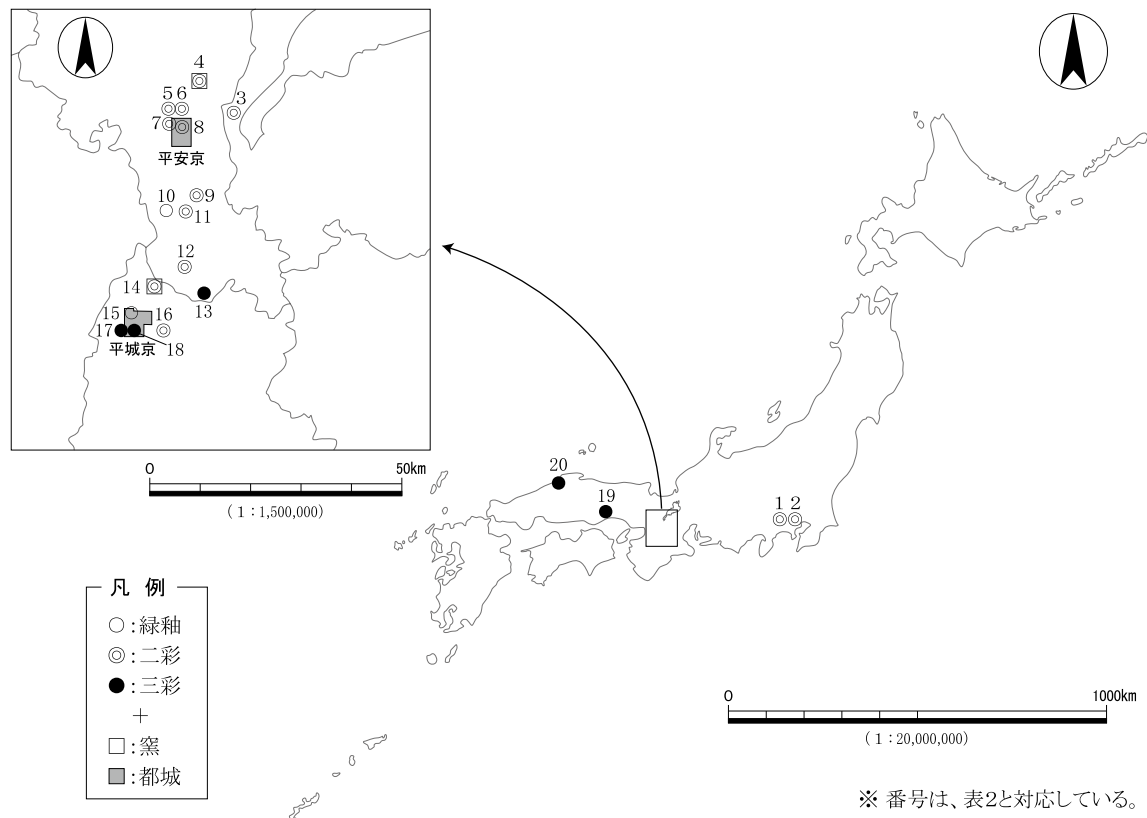


図1 多口瓶出土地分布図

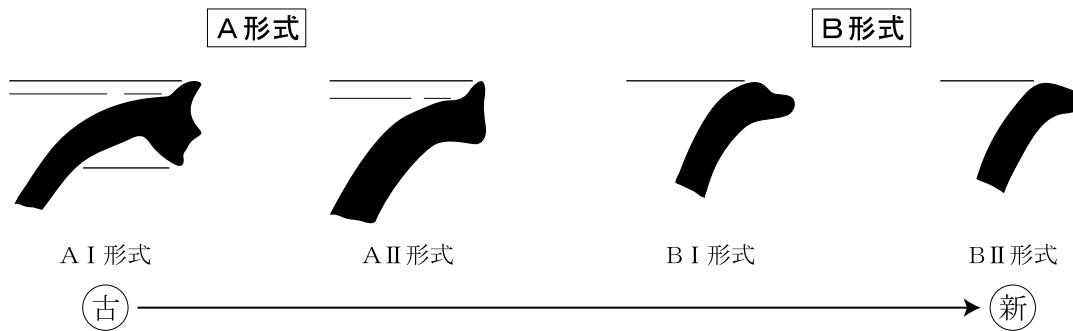


図2 多口瓶の子口口縁部形式分類図

生産地体制などについてまだまだ不明な点が多い。そのため、今回の調査地で出土した多口瓶と平安京周辺で出土した多口瓶を中心に分析データを蓄積し、微力ではあるが今後の多彩釉陶器研究の一助としたい。

(3) 考古学的考察（多口瓶の時期的変遷）

多彩釉多口瓶の出土分布図をみると（図1）、出土遺跡は、都が置かれた平城京や平安京からの出土が圧倒的が多い。この中で釉薬に注目すると、平安京内・周辺では二彩多口瓶のみである。対して、平城京周辺では、二彩だけでなく、三彩、緑釉の多口瓶が確認されている。このことから多口瓶は、平城京期では緑釉・二彩・三彩など多様なものが生産され、平安京期では二彩へと集約されていったとみられる。この変化は、製作技法の簡略化によるものと考えられる。

次に多口瓶の口縁部の形式に注目したい。口縁部を形式分類すると大きく2形式に大別でき、さらに4種類に分けることができる（図2）。A形式は、口縁端部を拡張し、外側に面を持つもの。B形式は、口縁端部が丸みをおびて外反するもの。これらをさらに細かく分類すると、A I形式は、口縁端部を上下に拡張し、口縁外面に稜線が巡る。A II形式は、口縁端部をつまみあげ、外側に面をもつ。B I形式は、口縁端部が丸みをおびて外反し、口縁端部上部に稜線が入る。B II形式は、口縁端部が丸みをおびて外反するものとなる。土器の形式変化を複雑なものからより簡略化されていくと想定すると、A I→A II→B I→B II形式へと変化していくと仮定することができる。次に、実年代がわかっている資料と形式の関係をみると、A I形式である奈良県佐保山遺跡出土のものが奈良時代後半、A II形式である北野廃寺のものが奈良時代後半から平安時代初頭⁸⁾、B I形式である今回出土した平安京右京一条二坊十六町⁷⁾のものが平安時代初頭、B II形式である栗栖野21号窯のものが平安時代初頭ということになり、形式の変化と出土品の年代は正確には反映されないが、大きくは矛盾しないものと考えられる。

(4) 科学分析の結果から

今回、平安京右京一条二坊十六町（本調査）・北野廃寺・栗栖野21号窯出土資料の胎土・釉薬について科学分析を知る機会を得た。その結果、本調査で出土した多口瓶の胎土については、洛北地域を生産地とすることに矛盾はないことが明らかとなった。この結果から平安京周辺から出土し

たAⅡ形式以降の多口瓶は洛北地域で生産されていた可能性があることを指摘しておく。そして、出土分布からみてもここで生産されていた多口瓶は、二彩に特化していたのではないだろうか。

また、蛍光X線分析の結果（付章1図2）をみていくと、約20～27%の値を示す北野廃寺・平城宮・京出土のグループ（以下、「Aグループ」とする）と、約15～20%の値を示す本調査・栗栖野21号窯・冷然院出土のグループ（以下、「Bグループ」とする）に分けることが可能である。これは、時期差を示しているのではないだろうか。遺跡・遺物の時期と子口口縁部の形式から、Aグループの口縁部はA形式で平安時代以前、Bグループの口縁部はB形式で平安時代以降と分けることができる。

（5）まとめと今後の課題

今回は科学分析と考古学的考察を行った。今回の調査地で出土した二彩多口瓶は、科学分析と発掘調査の結果から洛北地域の窯で生産され、平安時代初頭に整地をする際に廃棄されたものであることがわかった。また、科学分析の結果と多口瓶の子口口縁部に注目すると、時期差を垣間見ることができた。

今後の課題として、京都市内だけではなくその他の地域から出土した資料などを分析し、比較していく必要がある。そして分析データを蓄積していくとともに、考古学的な分析とも総合して考察していかなければならない。

註

- 1) 実際には、透明がかった薄緑色の釉薬である。透明釉から透けた素地の白さが際立ったため、「白色」としていると考える。
- 2) 唐時代に数色の釉薬を使用して作られていた施釉陶器を「唐三彩」と呼ぶのに対し、奈良時代に唐三彩の影響を受けて日本で生産されていた施釉陶器（釉薬の数に関わらない）を小山富士夫氏によって「奈良三彩」と呼ばれるようになる。しかし、現在の研究では平安時代初期まで製作されていたことがわかっているため、本論においては、釉薬数で「緑釉陶器」、「二彩陶器」、「三彩陶器」、これらを合わせて「多彩釉陶器」とする。
- 3) 榑崎彰一「日本古代の土器・陶器」『世界陶磁全集2』（日本古代）小学館 1979年
田中 琢「三彩・緑釉」『世界陶磁全集2』（日本古代）小学館 1979年
- 4) 出土地点は古墳と古墳の間にあり、奈良時代の二彩陶器窯の存在が指摘されている。周辺には平城宮関連窯も確認されており、供給場所としては地理的に申し分ない（伊藤勇輔・前園実知雄「奈良市佐保山遺跡群の試掘調査」『奈良県遺跡調査概要 1978年度』奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1979年）。
- 5) 出土資料のほとんどが小片である。小片であっても多口瓶と確認できる部位は子口の根本（肩部）の部分である。この部位は体部から肩を張り出して上部に上がる。報告書内で「多口瓶」と言及していない小片の場合、報告書内でこの部位が確認できたものを表2にまとめた。
- 6) 多口瓶の用途としてわかる例に薬師寺の調査がある。薬師寺は973年に焼失しており、西僧房と推定

される場所より土器類が火災で焼け残った状態で発見され、西僧房における土器類の使用形態を復原している（岡田英男 他『薬師寺発掘調査報告』奈良県立文化財研究所学報 第45冊 奈良国立文化財研究所 1987年）。

巽 淳一郎『日本の美術12』（NO.235 陶磁 原始・古代編）至文堂 1985年

- 7) 二彩陶器の胎土・釉薬の科学分析については、降幡順子氏に依頼した（付章1）。分析に用いた資料は、今回の調査で出土した資料の他に唯一の生産地からの資料である栗栖野21号窯出土の2点、今回の調査地から北に約300m程と比較的近い場所にあり、多口瓶の出土例の多い北野廃寺（本報告4頁図5）出土の8点を選択して分析を行った。
- 8) 北野廃寺は、飛鳥・白鳳時代から平安時代まで続く寺院であり、廃棄時期の平安時代より古い可能性は十分に考えられる。また、口径も本調査で出土したものと栗栖野21号窯から出土したものと比べて倍近く大きい。

表1 京都市内出土の二彩陶器一覧表

番号	遺跡名	遺跡の性格	出土遺構	器形	残存状況	文献	備考
1	北野廃寺(1次調査)	寺院	溝	多口瓶	口縁から頸部(子口)	1	分析資料3
2	北野廃寺(10次調査)	寺院	—	壺	高台	2(未掲載)	分析資料6
3	北野廃寺(10次調査)	寺院	—	瓶	高台小片	2(未掲載)	分析資料7
4	北野廃寺(10次調査)	寺院	溝	—	小片	2(未掲載)	分析資料8
5	北野廃寺(11次調査)	寺院	溝	壺	口縁部	3(未掲載)	分析資料9
6	北野廃寺(12次調査)	寺院	溝	多口瓶	口縁から頸部(子口)	4	分析資料2
7	北野廃寺(13次調査)	寺院	溝	壺	小片	5	分析資料4
8	北野廃寺(昭和56年度立会)	寺院	—	壺	底部小片	6(未掲載)	分析資料5
9	西寺	寺院	溝	鉄鉢	小片	7(未掲載)	
10	南春日町遺跡	寺院	—	壺	口縁部	8(未掲載)	
11	南春日町廃寺	寺院	—	皿?	小片	9(未掲載)	
12	南春日町廃寺	寺院	—	短頸壺	小片	9(未掲載)	
13	南春日町廃寺	寺院	—	短頸壺	小片	9(未掲載)	
14	南春日町廃寺	寺院	—	短頸壺	小片	9(未掲載)	
15	南春日町廃寺	寺院	—	小鉢	小片	9(未掲載)	
16	常盤仲之町遺跡	集落	—	壺	小片	10	輸入?
17	長岡京左京四条三・四坊	都城	溝	短頸壺	小片	11(未掲載)	
18	平安京左京五条三坊	都城	土坑	盤	体部から高台	12	輸入
19	平安京左京九条二坊十三町	都城	溝	短頸壺	小片	13(未掲載)	
20	平安京右京一条二坊十六町	都城	土坑	多口瓶	口縁(子口2つ)から体部	本報告書	分析資料1
21	平安京右京二条二坊五町	都城	土坑	多口瓶	小片	14(未掲載)	
22	平安京右京五条三坊二町	都城	—	托	—	15(未掲載)	
23	平安京右京七条一坊二・三町	都城	溝	—	小片	16(未掲載)	
24	平安京右京八条二坊八町	都城	包含層	短頸壺	小片	17(未掲載)	
25	栗栖野21号窯	窯	窯	短頸壺	口縁から体部	18	分析資料11
26	栗栖野21号窯	窯	窯	多口瓶	口縁から頸部	18	分析資料10
27	史跡名勝嵐山	庭園	園池	短頸壺	ほぼ完存	19(未掲載)	
28	史跡名勝嵐山	庭園	園池	短頸壺蓋	口縁から体部	19(未掲載)	
29	史跡名勝嵐山	庭園	園池	大壺	体部から高台	19(未掲載)	
30	梅ヶ畑祭祀遺跡	祭祀跡	包含層	壺など	小片	20	計36点

備考の分析資料番号は、付章1の表1と対応している。

表1 京都市内出土の二彩陶器一覧表 文献

- 1 堀内明博『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 2 鈴木久男・吉崎 伸「Ⅰ 第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化市観光局 1987年
- 3 本 弥八郎・木下保明「Ⅱ 第11次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化市観光局 1987年
- 4 木下保明「44 北野廃寺」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 5 久世康博「45 北野廃寺」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 6 家崎孝治「Ⅲ-4 北野廃寺, 北野遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 7 磯部 勝・鈴木久男・堀内明博「1章14 平安京右京九条一坊1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 8 上村和直「1章82 南春日町廃寺」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 9 『大原野の遺跡』発掘調査成果発表会資料 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年8月24日
- 10 加納敬二『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 11 長宗繁一・吉崎 伸・鈴木廣司「1章40 長岡京左京四条三・四坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 12 吉川義彦『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会 1998年
- 13 丸川義弘・木下保明・辻 裕司「9 平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 14 東 洋一・網 伸也・真喜志悦子「5 平安京右京二条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 15 木下保明「21 平安京右京五条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 16 平尾政幸・本 弥八郎「1章11 平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 17 菅田 薫「Ⅷ 平安京右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化市観光局 1988年
- 18 本 弥八郎「Ⅱ 栗栖野瓦窯跡の調査(その1)」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』京都市文化市観光局 1993年
- 19 木下保明「1章42 史跡名勝嵐山」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 20 高橋 潔「Ⅲ-4 梅ヶ畑祭祀遺跡(97UZ1)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年

表2 多彩釉多口瓶出土一覧表

番号	所在地	遺跡名	遺跡の性格	器種	残存状況	時期※1	口縁部形式	文献	備考
1	東京都	上石原遺跡	集落	二彩	一部口縁から頸部(子口)が無いが、約80%残存。釉の発色悪い。	奈良時代末から平安時代前期	B II	1	
2	東京都	上石原遺跡	集落	二彩	一部口縁から頸部(子口)が無いが、約80%残存。釉の発色悪い。	奈良時代末から平安時代前期	B II	1	
3	滋賀県	南滋賀遺跡	寺院	二彩	肩部(子口)4点、口縁部小片数点	—	A II	2	
4	京都府	栗栖野21号窯	窯	二彩	口縁から頸部(子口)	平安時代初頭	B II	3	分析番号10
5	京都府	北野麩寺(1次調査)	寺院	二彩	口縁から頸部(子口)	平安時代	A II	4	分析番号3
6	京都府	北野麩寺(12次調査)	寺院	二彩	口縁から頸部(子口)	平安時代	A II	5	分析番号2
7	京都府	平安京右京一条二坊十六町	都城	二彩	口縁(大口1つ、子口2つ)～体部	平安時代初頭	B I	本報告書	分析番号1
8	京都府	平安京右京二条二坊五町	都城	二彩	小片	平安時代前期	—	6(未掲載)	
9	京都府	大鳳寺跡	寺院	二彩	頸部から肩部(子口)	平安時代前期	—	7	
10	京都府	久世麩寺	寺院	緑釉	口縁(子口)から高台	奈良時代	—	8	灰釉もあり
11	京都府	久世麩寺	寺院	二彩	口縁(子口)から高台	奈良時代	A II	8	
12	京都府	高麗寺跡	寺院	二彩	口縁から頸部(大口または子口)	奈良時代から平安時代初頭	B II	9	
13	京都府	樋ノ口遺跡	官衙※2	三彩	高台1点、口縁から頸部(子口)1点	奈良時代から平安時代初頭	B II	10	
14	奈良県	佐保山遺跡	窯※3	二彩	口縁から頸部(大口・子口)2点※4	奈良時代後半?	A I	11	
15	奈良県	西隆寺	寺院	緑釉※5	頸部から肩部(子口)	奈良時代末期頃	—	12	灰釉もあり
16	奈良県	姫寺	寺院	二彩	口縁から頸部(子口)	平安時代	B II	13	
17	奈良県	薬師寺	寺院	三彩	ほぼ完存	973年	B II	14	灰釉もあり
18	奈良県	薬師寺	寺院	三彩	頸部(子口)から高台	973年	—	14	
19	岡山県	ハガ遺跡	官衙	三彩※6	口縁から頸部(大口?)が1点、肩部(子口)が2点、口縁端部2点、高台1点、小片5点	奈良時代から平安時代前期	B I	15	
20	島根県	鹿蔵山遺跡	官衙	三彩※7	口縁から頸部(子口)が1点、高台1点、口縁部など小片10点	奈良時代	B II	16	

番号は、図1と対応している。備考の分析資料番号は、付章1の表1と対応している。

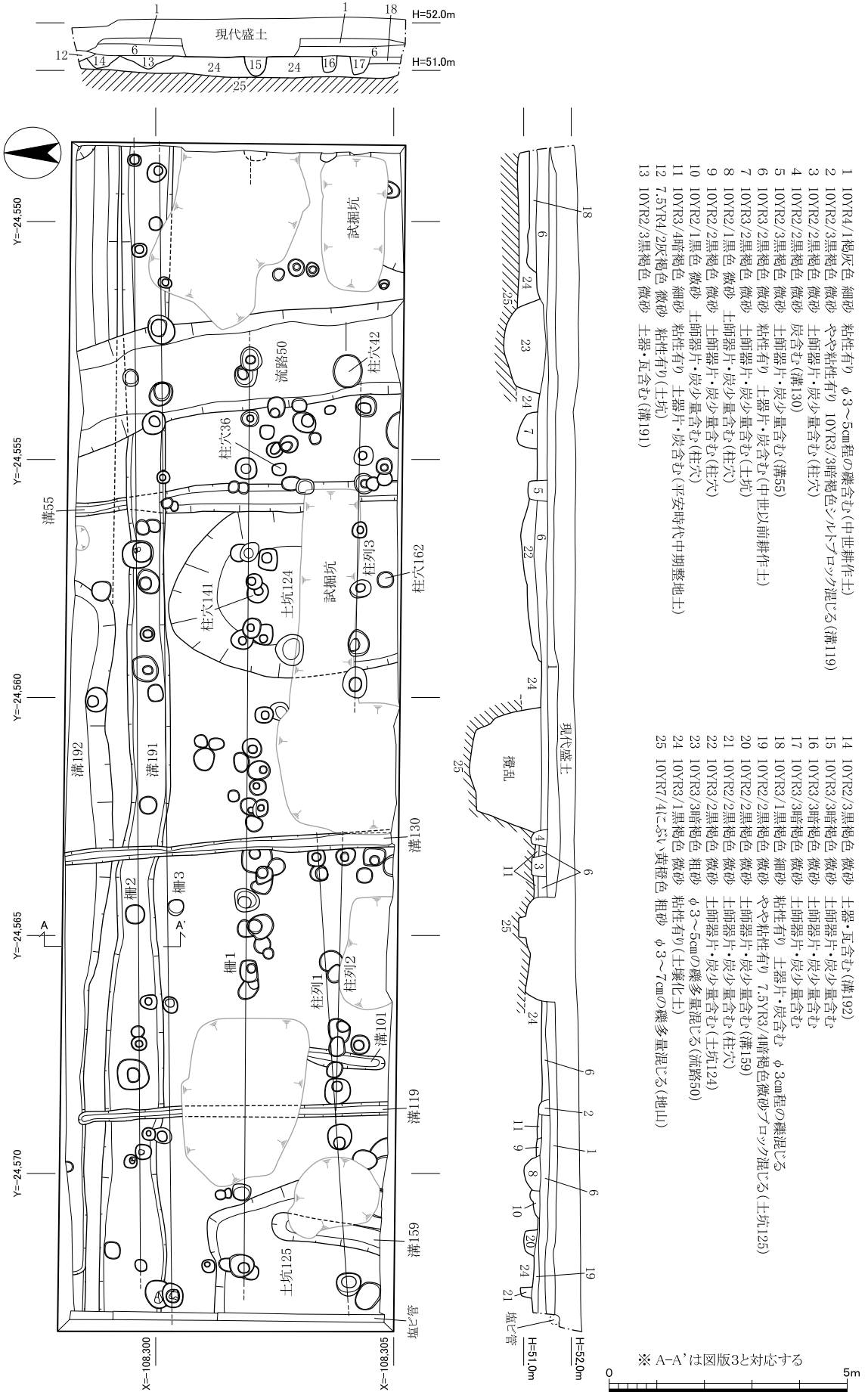
- ※1 「奈良三彩」＝「奈良時代」としている報告書が多々見受けられる。本文にて先述したように多彩釉陶器は平安時代初期まで生産されていることがわかっている。この点について今後、気をつけねばならない課題だと考えられる。
- ※2 離宮説と寺院説が浮上している。寺院の場合、1209年に焼失しているが調査で焼失の痕跡が確認できなかったことから文献史料と一致しない。
- ※3 墳墓の間で遺物が検出された。窯の可能性が指摘されている。
- ※4 大口と子口と考えられる大小1つずつ口縁から頸部を確認した。多口瓶の可能性はある。
- ※5 風化が著しく、現状では緑釉のみ残存しているが、二彩であった可能性も考えられる。
- ※6 検出された遺構・遺物から寺院的施設とそれに伴う工房跡が周辺にあったと考えられる。
- ※7 周辺の出土品から「堂」と墨書された土器が確認されていることから仏堂などの施設で使用されていた可能性が考えられる(高橋照彦「第7章 鹿蔵山遺跡出土の奈良三彩について」文献16)

表2 多彩釉多口瓶出土一覧表 文献

- 1 紀野自由「東京都調布市上石原遺跡出土の二彩多口瓶」『考古学雑誌』第79巻 第3号 日本考古学学会
1994年
- 2 滋賀県教育委員会『南滋賀遺跡』財団法人滋賀県文化財保護協会 1993年3月
滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器－多彩釉 緑釉 灰釉 瀬戸 美濃－』1986年
- 3 本 弥八郎「栗栖野窯跡の調査」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993年
- 4 堀内明博『北野廃寺 発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 5 久世康博「45 北野廃寺」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 6 東 洋一・網 伸也・真喜志悦子「5 平安京右京二条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 7 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告 第1冊 宇治市教育委員会 1987年
- 8 近藤義行「3. 久津川遺跡群発掘調査概報 久世廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 第10集』城陽市教育委員会 1981年
- 9 『史跡 高麗寺跡』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第7集 山城町教育委員会 1988年
- 10 伊野近富「樋ノ口遺跡の調査」『京都府埋蔵文化財情報 第42冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
伊野近富「7. 樋ノ口遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第48冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年
- 11 伊藤勇輔・前園実知雄「奈良市佐保山遺跡群の試掘調査」『奈良県遺跡調査概要 1978年度』奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1979年
- 12 山崎信二 他『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所40周年記念学報第52冊 奈良国立文化財研究所 1993年
- 13 佐藤興治・川越俊一 他『平城京左京八条三坊発掘調査概報－東市周辺東北地域の調査－』奈良国立文化財研究所 1976年
玉田芳英「平城京姫寺出土の二彩・三彩陶器」『奈良国立文化財研究所年報 1994』奈良国立文化財研究所 1994年10月
- 14 岡田英男 他『薬師寺発掘調査報告』奈良県立文化財研究所学報 第45冊 奈良国立文化財研究所 1987年
- 15 草原孝典『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会 2004年
- 16 石原 聡 他『鹿蔵山遺跡』大社町立大社小学校改築工事に伴う発掘調査報告書 大社町教育委員会 2005年

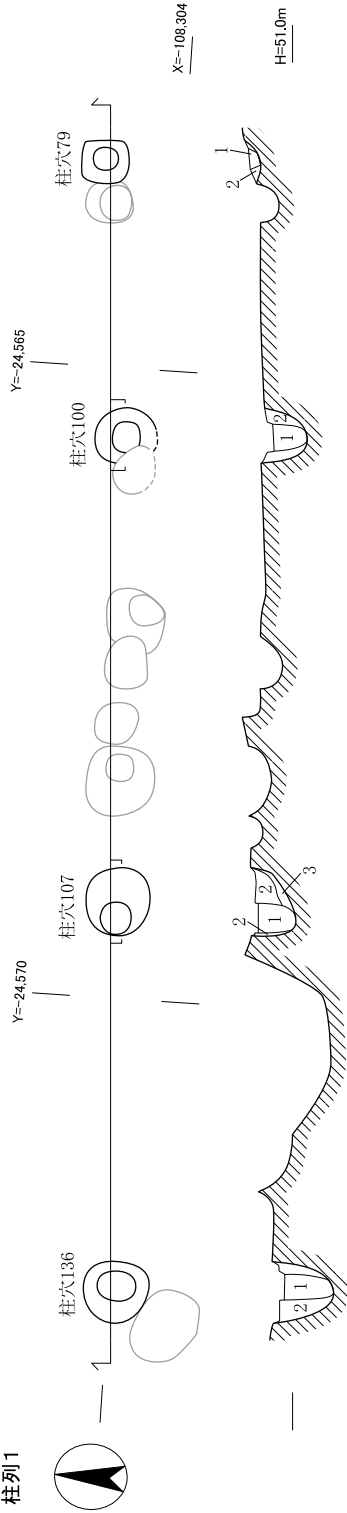
圖 版

図版1 遺構



調査区実測図 (1 : 120)

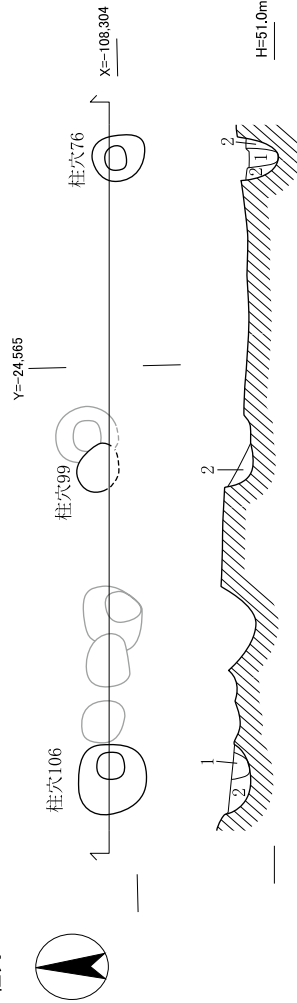
柱列1



柱列1

- 1 10YR2/3黒褐色 微砂 粘性有り 土師器片・炭含む
- 2 10YR2/2黒褐色 微砂 10YR4/3にぶい黄褐色 シルトブロック混じる
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト

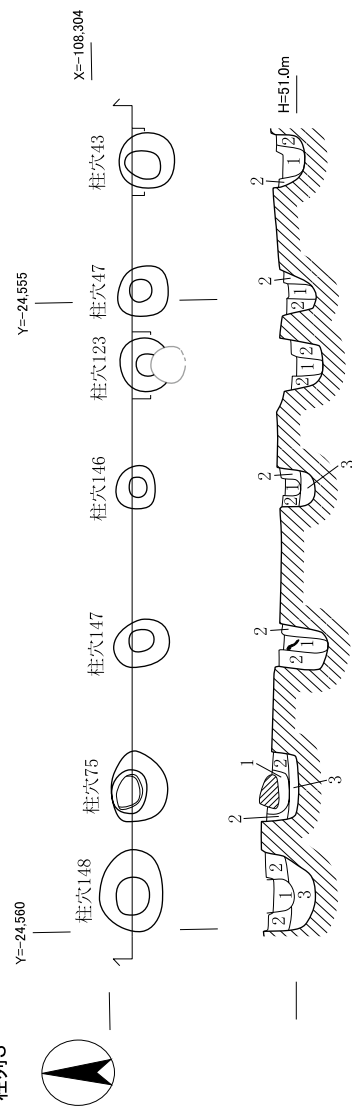
柱列2



柱列2

- 1 10YR2/2黒褐色 微砂 粘性有り 土師器片・炭含む
- 2 10YR2/3黒褐色 微砂 粘性有り
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック混じる

柱列3



柱列3

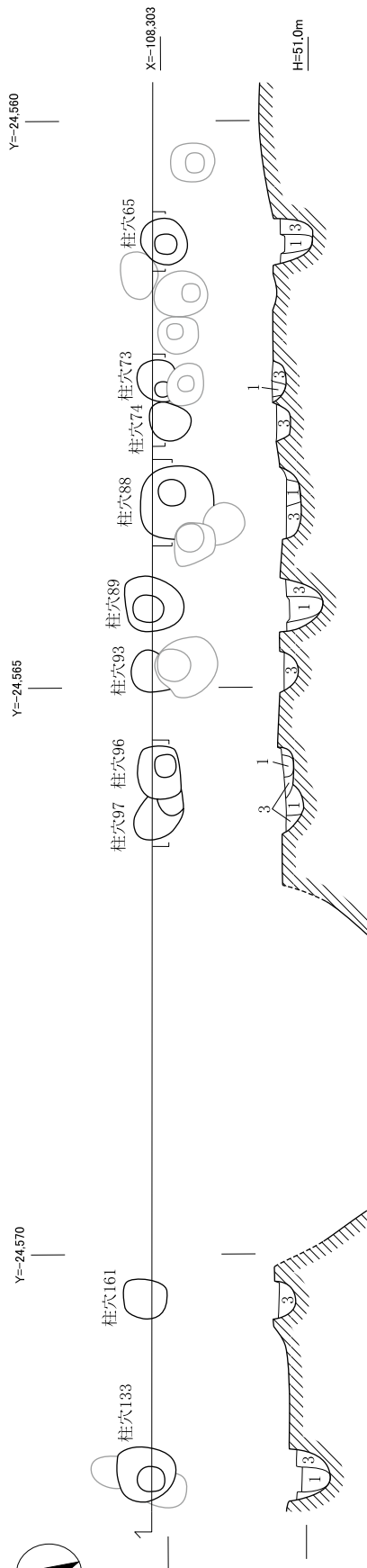
- 1 10YR2/1黒色 微砂 粘性有り 土師器片・炭多量含む
- 2 10YR2/2黒褐色 微砂 土師器片・炭含む
- 3 10YR3/1黒褐色 微砂+10YR4/1褐灰色 細砂 φ1~2cmの礫混じる



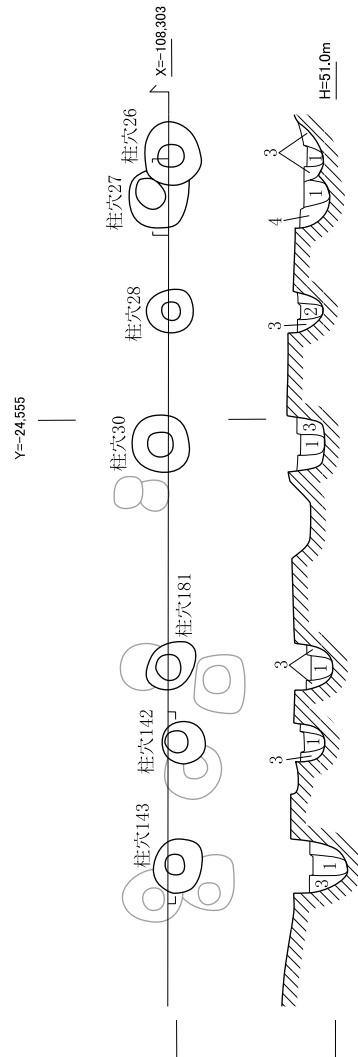
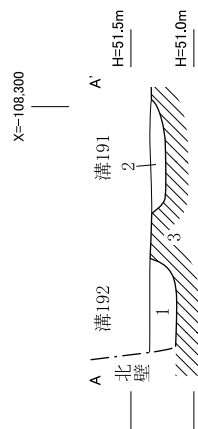
柱列1～3実測図 (1:60)

柵 1 実測図、溝 191・192 断面図 (1 : 60)

柵 1



溝 191・192

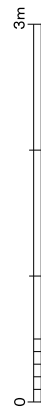


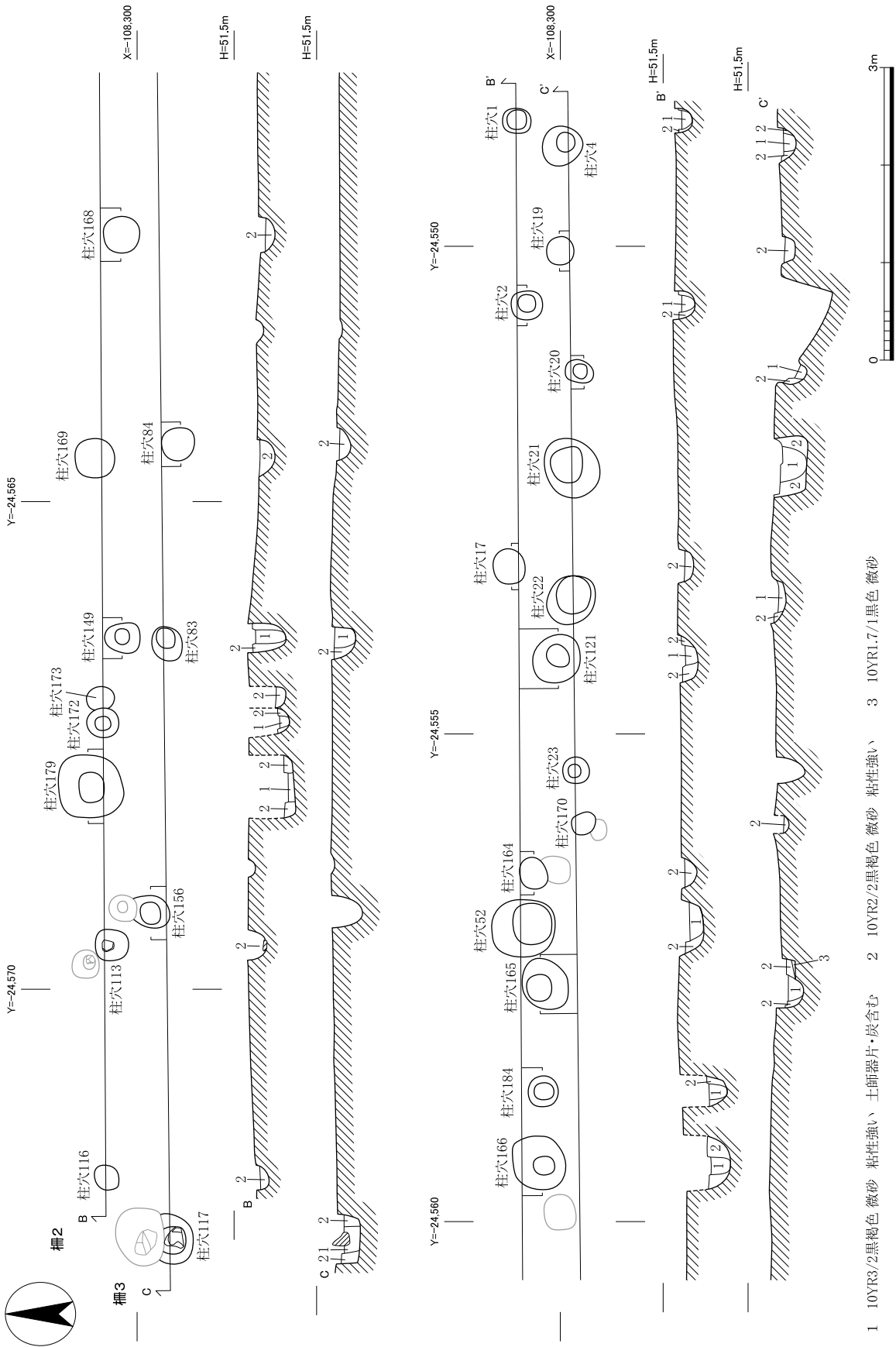
柵 1

- 1 10YR2/1黒色 微砂 粘性有り 土師器片・炭含む
- 2 10YR3/4暗褐色 微砂
- 3 10YR2/3黒褐色 微砂 粘性有り 炭少量含む
- 4 10YR2/2黒褐色 微砂 炭含む φ~1cm程の礫少量混じる

- 1 10YR2/2黒褐色 微砂 土器類・瓦片含む φ 1mm程の礫混じる(溝192)
- 2 10YR2/3黒褐色 微砂 φ 1mm程の礫混じる(溝191)
- 3 10YR3/1黒褐色 微砂 粘性有り(土壌化土)

※ A-A' は図版1と対応する。





柵 2・3実測図 (1 : 60)



1 調査区全景（西から）



2 流路50完掘状況（北から）



1 土坑124完掘状況（北から）



2 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうにぼうじゅうろくちょうあと							
書名	平安京右京一条二坊十六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-1							
編著者名	岡田麻衣子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしきたく 京都市北区 たいしょうぐんひがしたかつかきちやう 大將軍東鷹司町 109番地1、 110番地	26100	1	35度 01分 24秒	135度 43分 51秒	2019年4月 1日～2019 年4月26日	175㎡	集合住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代	流路	土師器、須恵器		平安時代の土御門 大路南側溝を検出 した。 二彩多口瓶が出土 した。		
		平安時代前期	土坑、柱列	土師器、須恵器、二彩 陶器、瓦				
		平安時代中期	溝、柱列、柵列、 土坑	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-1
平安京右京一条二坊十六町跡

発行日 2019年9月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961